

アジア文化造形学会誌

第17号

アジア文化造形学会
2019

東北の祭り・芸能と祈りの文化

東北文教大学 菊地和博

はじめに

本稿は、山形県に在住する筆者が民俗学的観点から東北地方の夏祭り、シン踊り、山の信仰、家につつまれるカミなどの事例を取り上げた。そこには、亡くなった方々の鎮魂供養を目的とした習俗や芸能、儀礼などを見出すことができる。その背景にあるのは、狭隘な耕地・多雪・寒冷地であるが故の度重なる凶作・飢饉などの厳しい歴史風土である。本稿では、それに耐えながら祈りの心と知恵をもって生き抜こうとする人々の姿を浮かび上がらせようとしたものである。

1. 東北の夏祭り

東北地方では、太平洋北東方面から冷温で霧雨混じりのヤマセという風が吹く。この風が7・8月の稲の成長期および開花期に吹き続けると、稲穂の成長が止まって米が収穫できず、いわゆる冷害となる。特に悲惨な江戸時代の大飢饉は主としてヤマセが原因で起っている。餓死と疫病などの災厄除去と五穀豊穡のためには餓死者への丁重な「怨霊鎮魂」が必要とされ、そのために祈りと供養の祭礼芸能が稲の開花期の夏場に行われた。それが東北地方の大部分の夏祭りの根底にあるものである。以下に、江戸時代から続く東北三県の夏祭りをみていく。

(1)青森県の「ねぶた(ねぶた)」

現在でも青森県内の40数か所で行われている「ねぶた(ねぶた)」の原初的な姿は、以下に紹介する2つの資料が参考となる。

まず、天明8年(1788)弘前藩士の比良野貞彦が著した『奥民図彙』に「子ムタ祭之図」がある(1)。この図では長方形や四角形の大きな燈籠(田楽提灯)が人々によって山車のように担がれて行列をなしている。燈籠には「七夕祭」の文字も見える。「ねぶた流し」の行事は、七夕の夜に短冊を結びつけた笹竹などを川や海に流したことが根源にあり、このとき燈籠も一緒に流したのである。

次に、江戸時代の菅江真澄が著した『外浜奇勝(前編第1部)』に記された木作(現つがる市木造)の7月4日・5日の行事が参考となる(2)。以下は筆者の意識であるが、次のような内容が読み取れる。

日が暮れると、笛やつづみで囃子どよめいて、子どもたちは一人ひとり手ごと、思い思いに作った燈の器(燈籠)を持ち、それを照らし振りかざしながら、宵から夜ふけまで群がって歩くのは、例のねぶた流しであろう、ねぶたも流れよと囃子ながら歩いてかまびすしいほどである

この文章から、人々が手にする「燈の器」つまり燈籠のようなものが現在の「ねぶた(ねぶた)」の原型と考えられる。この「燈の器」を川や海に流して厄払いやホトケを供養する行事が、いわく

る「ねぶた流し」である。それは、短冊を結びつけた笹竹や燈籠などを毎年7月上旬に川や海に流す行事であり、「七夕まつり」の要素を含んでいる。つまり、川や海に流すのはケガレや災厄などを払い清める意味をもつが、一方では先祖（ホトケ）の鎮魂供養の意味をもっている。

時代が進むと、この「ねぶた流し」は弘前城下から青森方面に伝播し、大型の「人形燈籠」が出現するようになる。それが今では「青森ねぶた祭り」に発展し、東北の夏祭りを代表するものになっている。「青森ねぶた祭り」の最終日にねぶたを船に乗せて青森港内を航行する「ねぶた海上運行」があるが、それはかつての「ねぶた流し」の名残りともいえる。他方、現在の「弘前ねぶた祭り」は、青森のねぶたの形態とは異なって小型であり、おおよそ扇形が多いので「扇燈籠」といわれる特徴をもつ。

参考事例として、秋田県北秋田郡小阿仁村の「七夕のネブ（ネブタ）流し」を紹介する（野本, 2014, pp. 164-165）。

ネブ流しの燈籠の上には2, 30 cmのネムノキ・カヤ・萩の花を付ける。その燈籠を長さ1mほどの棒の先につけてワカゼ（青年）が持って、集落を一周する。笛と太鼓をワカゼが鳴らし、子どもたちは燈籠を持って歩きながら、「ネブタも流れて、ケガゼ（ケガツ・不作）も流れて、あーとの福はつとまれ、ほーいほい」と歌う。集落を一周すると、燈籠の上に付けていたネノムノキカヤ萩の花を外して川に流す。

青森県と秋田県を通じて、このような「ねぶた流し」の行事は「ケガゼ」を流す、つまり凶作・飢饉を流して（厄払いして）先祖（ホトケ）に豊作を約束してもらい、という切実な心と一緒にあったことを知るのである。

(2)秋田県の「竿燈」

秋田県の夏祭りとして名高い「竿燈（かんとう）」の古い姿は、まず寛政元年（1789）の津村淳庵著『雪の降る道』に記された「ねむりながし」に見出される(3)。そこには竿を十文字に組み、それにたくさん灯火をつけて練り歩く様子が示されている。次に、文化11年（1814）の『秋田風俗問状答』には以下のようなことが記されている(4)。

六日夜、眠り流しと申事、風俗にて候。長き竹に横手を幾段にも結、大なる燈籠三十四五十も付る也。兒童十才ばかりまでは手ことに品々の燈籠を持ちて遊び、家ことに門に燈籠を掛る。此夜麻からを己か年の数折て草のかつらにてからけ、枕の下へひしきて七日の朝とく川へ流すなり。これを眠りなかしと云う。

ここにみられるように、秋田の竿燈とは7月6日夜から朝にかけて行われる「眠りながし」の行事がもとであると考えられる。それは七夕行事であるとともに、子どもが燈籠を持って遊んだり、それを家ごとの門に掛けたりする行事でもある。燈籠をかかげるとは、お盆で死霊を招き入れるためであり、この行事はお盆との習合した姿なのである。このことから、秋田県の竿燈と青森県の「ねぶた流し」の根源はほぼ同じと考えられる

(3)宮城県の「仙台七夕」

宮城県の「仙台七夕」の祭りについては、近江恵美子著『仙台七夕 伝統と未来』が参考となる(近江, 2008, pp40-41・60-61)。そこでは仙台七夕のメインである竹飾り、つまり七つ飾りに関ることが詳細に述べられている。七つ飾りとは、「短冊」「紙衣」「折鶴」「巾着」「投網」「吹き流し」「屑籠」である。これは竹飾りの基本で明治期に確立されたという。さらに注目すべきは、このほかに「灯入れ行灯」と「七夕線香」が伴っていることである。

「灯入れ行灯」とは、西瓜などの野菜をかたどったといわれるものである。それはお盆の先祖迎えを意味する「迎え火」を示すものであるという。さらに西瓜という農作物をかかげる意味から豊作祈願を願うものとされている。もう1つが「七夕線香」といわれるものである。これは線香になぞらえた十数本の棒状を円形に束ねたかたちで吊したものであり、先祖(ホトケ)の霊を供養する意味をもつといわれている。

このほかに、次のような事例があげられている。かつては豊作祈願に七夕飾りを大根畑に立てた地域もあったという。また麦藁で「七夕馬」が作られていたことから、田の神様がそれに乗って訪れるという伝承があったということである。

以上から、仙台七夕は「農業生産への祈り」や「ホトケ供養」が結びついたものと考えられているのである。町をあげての七夕祭りは江戸では廃れたが、仙台藩では民俗信仰を根底に独自の発展をとげて今に続いていることが注目される。

そもそも七夕の笹竹と施餓鬼の幡は同種のものという捉え方があり、施餓鬼とは元来死者供養のことだという観念があったとのことである(高谷, 1995, pp111-118)。つまりは、日本の七夕行事には「ホトケ供養」や鎮魂供養の意味合いが垣間見える。

2. 東北のシシ踊り

東北のシシ踊りについて、菊地和博の調査内容からその特徴や実態をみてみよう(菊地, 2012, pp51-115)。まず、東北では死者供養のために踊る事例が多いことが特徴としてあげられる。関東系のシシ踊り(三匹獅子舞)にはそういう事例はほとんどみられない。東北北部の青森県・岩手県・秋田県のシシ踊りが、お盆に墓地や遺影、位牌を前にして踊られている多くの事例を取り上げている。その意味は、現在では先祖供養のためであるが、本来は餓死者や戦死者または不慮の事故等で亡くなった人々の怨霊を鎮めるためである。以下に具体的にみてみよう。

シシ踊りに寺院の施餓鬼供養とのかかわりをもつ事例がある。施餓鬼供養は餓鬼道に堕ちた亡者、つまり餓鬼や無縁仏などを丁重にもてなし供養する盆行事である。そうしなければ村や家に祟りをなすと考えられた。山形県酒田市本楯の新田目獅子踊、八幡町の青沢獅子踊、鶴岡市藤島町の添川獅子踊、平田町の桜林獅子踊などは、寺院で行われる施餓鬼供養の際に踊り、あるいは供養で使用した紙の梵天や布の施餓鬼旗を身につけて踊る。それはまぎれもなくシシ踊りによる餓鬼や無縁仏など、悪霊への鎮魂供養ととらえることができる。秋田県大仙市(旧中仙町)の東長野ささら(シシ踊り)も寺院の施餓鬼供養の最中に演じられる。その巻物「盆の獅子踊之由来記」には「亡者供養」の言葉が頻出する。それは身寄りのない無縁仏などをさしていると思われる。

ところで、盆は先祖の霊がかえってくる時期であるが、「釜蓋朔日」といわれるように、地獄の釜の蓋が開いて悪霊や亡霊、餓鬼や無縁仏などもたくさんやってくると考えられた。先祖用の精霊棚とともに無縁仏用の施餓鬼棚も作って丁重に鎮魂したのである(高谷, 1995, pp.103-122)。

前述したように東北北部では、現在でもお盆期間中に墓で演じるシシ踊りが目立つ。先祖代々の墓は各家族が丁重にお参りを行う。その傍らで、シシ踊りは墓地の一角を踊りの場として演じ始め

る。青森県平川市（旧碓ヶ関村）の古懸獅子踊のように墓の間を踊り歩くのもある。

この状況は、今述べた施餓鬼供養と合わせて考えると、無縁仏など誰にも相手にされないいわば邪霊を供養し鎮魂するものということができる。墓で踊るシン踊りは個人々の先祖供養というよりは、地域共同体の「邪霊鎮め」の意味もこめられていたのではないかと考えられる。

青森県南津軽郡大鰐町三ツ目内獅子舞がかつては8月14日の夜、マキを持ち寄って集落の路上に積んで燃やし、その明かりのもとでシン踊りを行った。それは、集落全体の幸福のため無縁仏など悪霊を村から追い出す意味の鎮魂供養を念頭に行われていたのではないか。このほか夜に街頭で踊った例は、弘前市にある悪戸獅子踊、国吉獅子踊、中畑獅子舞などがある。津軽地方のシン踊りはもともと夜に行うものだったのである。

山形県山形市立石寺では、江戸時代から旧暦7月7日に山形市周辺の村山地方のシン踊り団体が山寺に参詣し踊りを奉納し続けてきた。古来死霊がおもむく山として庶民信仰をあつめてきた山寺である。文化庁『日本民俗地図Ⅰ』によれば、旧暦7月7日は盆の入りであり、東北地方では「ナヌカビ」といって墓掃除をする地域が多い(5)。まもなく祖霊が帰って来るにあたって、その前に無縁仏や邪霊を鎮魂しようとシン踊りが山寺に登ってきたことが考えられるのである。このシン踊り奉納は、現在でも毎年山寺の「磐司祭」（かつては旧暦7月7日、現在では8月第1日曜日）で数団体によって続けられている。

3. 東北の山の信仰

山形県の羽黒山・月山、山寺立石寺、青森県下北半島の恐山などには死者の霊魂が赴く山としての共通性があり、それは山上他界観あるいは山中浄土観に基づく信仰によるとみられる。また、それに類似するものとしてモリノヤマ信仰とハヤマ信仰もあげられる。

(1)月山信仰

出羽三山の一つである月山は死者の赴く山であり、阿弥陀如来が住まう浄土の世界である。その表れとして、現在でもお盆に月山山頂で行われる柴燈祭（さいとうさい）がある。8月13日、月山山頂で山伏が祭壇を築き火を焚く。山形県庄内地方では山頂の火を見たら家々で迎え火を焚いて祖霊迎えをするのである。そのとき発する唱え言葉は「お精霊様、お精霊さま（またはじじちゃ、ばばちゃ）、この火に乗ってござらんしょ」である。また8月16日には送り火を焚いて、月山に再び送り返す祖霊送りをする。

(2)恐山信仰

青森県下北半島のむつ市には恐山といわれる死者の霊魂が赴く山がある。以下は実地調査をよび『山と信仰 恐山』による(6)。東北では「死ねば、お山（恐山）さ行く」と代々伝えられており、恐山は死者の霊魂が向かう山としての認識が古くから明瞭化されてきた。7月22日から24日まで恐山大祭（地蔵会）が行われ、盲目の女性であるイタコの「口寄せ」（仏おろし）が行われることで知られる。恐山の山中には血の池地獄、賽の河原、極楽浜などがあり、宇曽利湖に向かって死者の名を叫べば霊が戻ってくるなどの信仰もある。また、歯骨を納める「納骨塔」もあり、そこには以下に記すモリノヤマ信仰や山寺立石寺の信仰との共通性がみられる。

(3)モリノヤマ信仰（モリ供養）

山形県庄内地方に多く見られるモリノヤマ信仰については、『庄内地方のモリ供養の習俗』が詳しく以下はそれによる(7)。モリノヤマ信仰の代表的なものに鶴岡市清水地区で行われている三森山の「モリ供養」がある。現在でも8月22日と23日の2日間、地区の人々は三森山に登って死者(先祖)を供養する習俗が続いている。そのモリ供養の本質は餓鬼仏や無縁仏、つまり祟りをなす怨霊に対する鎮魂供養であると考えられている。

モリノヤマの由来については、慈覚大師亡母供養説、合戦の戦死者供養説、水難・餓死者供説など諸説があり明確なことはわからない。江戸時代のモリノヤマについて、進藤重記『出羽国風土略記』は、「淀川組にも森の山といふて七月二十二日の夜より翌朝まで麓清水村の寺家登山して(中略)親子兄弟の亡霊の手向けとす」と記している(8)。

清水地区三森山のモリノヤマ信仰の特徴として、山上で「施餓鬼供養(施食供養)」が実施されること、死者の歯骨納めが行われること、さらに「モリヤッコ」(子どもたち)への施しがみられることである。「モリヤッコ」とは、山に登ってきた子どもたちを気の毒な「餓鬼仏・無縁仏」(つまり怨霊)とみなして大人側が金品を授与する行為をさしている。

(4)ハヤマ信仰

菊地和博はハヤマとモリノヤマについて、次のように説明している(菊地, 2004, p116)。山形県の村山葉山は、村山市の西方にある標高1,461メートルの山である。この山には貞観12年(870)に「白磐神」の山として従五位下の神位が授与されている。白磐神とは村山葉山の神だと考える説が有力である。当時、人々によって尊いと考えられる山々には、人間と同じように位が授けられた。

さて、葉山は「端山」と書き表したほうがより実態を示している。つまり山地中央部からは端にあって、平野部の集落から眺めればすぐ近くにある山が端山なのである。こういう山は死者の霊が最初に赴く山であり、それはやがて祖霊として家族を見守ってくれるという信仰が山麓集落の人々に芽生えた。このハヤマ信仰は山形県内陸地域ばかりではなく岩手県・宮城県・福島県に広がっている。福島県では、阿武隈山地の東側海岸地域とその西側の山すその地域に多く分布する。福島市松川町金沢の黒沼神社と相馬郡飯舘村大倉の福善寺では、夜籠もり(羽山ごもり)と託宣の儀礼をともなった作神信仰としての「ハヤマ祭」が現在でも続いている。この祭りは国の重要文化財に指定されている。

山形県の村山葉山は、中世以降は大円院を中心施設として山伏たちが山中で修行をする山岳信仰の山となった。江戸時代に葉山の影響を受けた山伏はじつにたくさんいた。彼らは村人に対してさまざまな祈祷や占いを行うなど、多くの宗教行為を施して村々をまわった。この葉山は山伏が信仰し修行する山とともに、一方ではいつの頃から農民の信仰する山ともなった。つまり、豊作をもたらす作神(農耕神)が住む山だったのである。葉山大円院が稲や農作物に被害をもたらす虫除札(虫を駆除するお札)を発行してきたことがそのことを示している。『河北町の歴史』では、江戸時代に虫除札は年間3万枚も発行されたと記している。農民はそのお札を竹や小枝に挟んで田んぼや畑に立てて豊作を祈ったのである(9)。

村山地方では「葉山講」もいくつか組織された。その一例として、河北町岩木地区では旧暦5月20日に集会を開いて葉山の神に祈りを捧げた。尾花沢市延沢地区では1月20日の集会で大円院苗代祭りへの代参者を決めていた。大円院に納められた奉納額からは、山形市にも葉山講があったことがわかる。

4. 東北の家にまつられるカミ

菊地和博の「家にまつられる神々」では以下の説明がなされている(菊地, 2015, pp. 280-354)。まず、よく知られているオシラサマは、青森県・岩手県・宮城県北部沿岸・秋田県の一部でまつられているカミである。オコナイサマは、山形県庄内地方にみられが、同じ山形県でも置賜地方ではオトウカサマといわれるカミがまつられる。さらに福島県ではオシンメイサマと呼ばれる家のカミがある。

これらのなかで、素材的特徴としては、オシラサマ・オトウカサマ・オシンメイサマは色々な布地で作られているものが多いが、山形県庄内地方のオコナイサマは白の和紙で作られているものが多い。

なかでも、東北の多数を占めるオシラサマの特徴は巫女が関与することが多いことで、決まった祭日に布を着せ替え「オシラ遊ば」をしたり、巫女が「オシラ祭文」を唱えたりすることが多い。その際には巫女による神のお告げもある。

東北の家のカミの機能としては、養蚕の神、田の神、福の神、火伏の神、目の神などの地域によって、また家によってじつに多様な役割をもっている。

参考までに、北方の人々の守り神として、アイヌ民族の家のカミであるチセコロカムイは家の東隅に安置する。カラフトのウィルタ族の家のカミはセワポロロといい、首にはアイヌの祭具イナウをかけている姿が印象的である。

以上の東北地方の家のカミの起源や意味は、日本列島の南西方面との繋がりとともに、北方民族の家のカミを視野に入れながら多面的に検討を重ねる必要がある。

まとめ

これまでの考察を通して明らかとなったことを以下に簡潔にまとめてみる。

1. 東北の夏祭り・シン踊り・山の信仰などについては、死者の亡魂供養、怨霊の鎮魂などが底流にうかがうことができる。特に怨霊を丁重に祀れば、幸福や豊作をもたらすという考えつまり「御霊信仰」もみられる。
2. 死霊が向かうハヤマ・モリノヤマ信仰は、月山・恐山信仰ともつながる庶民信仰であり、死者(ホトケ)を遠ざけず身近かに想い続ける人々の心が表出されている。
3. 家にまつられるカミは、狭隘な耕地、多雪、ヤマセによる冷害・飢饉など、厳しい生活風土に身を晒して生きてきた北国の人々が生んだ知恵ともいえる。その源流や意義は、東北アジア的な広い視野のもとで検討されるべきである。

注

1. 弘前藩士であった比良野貞彦が著した『奥民図彙』は、現在は1973年に「郷土双書」として青森県立図書館から出版されている。
2. 菅江真澄が著した寛政8年(1795)の「外浜奇勝(前編第1部)」は、現在は『菅江真澄全集』第三巻 pp. 125-191に収められ、1972年に未来社から出版されている。
3. 津村涼庵が寛政元年(1789)に著した『雪の降る道』は、『日本庶民生活史料集成』第20巻 探検・紀行・地誌(補遺) pp. 735-811に収められ、1972年に三一書房から出版されている。
4. 「秋田風俗問状答」は『日本庶民生活史料集成』第9巻 風俗 pp. 492-532に収められ、1972年に三一書房から出版されている。

5. 『日本民俗地図Ⅰ (年中行事)』 (文化庁 1969年) には各地の盆行事の実態が記されており、比較研究データとして貴重である。
6. 宮本袈裟雄・高松敬吉『山と信仰 恐山』 (佼成出版社 1995年) では平易な文章で恐山信仰を多面的に紹介している。
7. 『庄内地方のモリ供養の習俗』 (山形県教育委員会 2009年) は、文化庁助成事業として3年間にわたる調査研究の成果をまとめたもので、これまでにない詳細な研究報告書である。
8. 進藤重記が宝暦12年(1762)に著した『出羽国風土略記』は、1974年に歴史図書社から出版されている。
9. 『河北町の歴史』上巻 河北町誌編纂委員会 1962年

引用・参考文献

- 近江恵美子『仙台七夕 伝統と未来』大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書 2008年
菊地和博『シン踊り—鎮魂供養の民俗』岩田書院 2012年
菊地和博「モリノヤマとハヤマ」『東北学への招待』所収 京都造形芸術大学 2004年
菊地和博「家まつられる神々」『民俗行事と庶民信仰』所収 岩田書院 2015年
高谷重夫『盆行事の民俗学的研究』岩田書院 1995年
野本寛一『人と樹木の民俗世界』大河書房 2014年

Traditional Festivals, Folk Entertainment and the Culture of Votive Prayer in Tohoku Region

Kazuhiro kikuchi

This paper is about a variety of folk traditions in Tohoku Region, such as summer folk festivals, Shishi-Odori, faith of worshipping mountains, and guardian deities of households. All of these traditional and local customs come with particular practices, folk entertainment and ethnic rituals for the repose of the ancestors' spirits. Furthermore, behind these traditional events, there is always earnest prayers and pleas against misfortune due to insufficient land for cultivation or heavy snow, which have repeatedly brought lean crops and famine to the region. People have forged their lives through the hardship originating from the frigid climate of the region.

In this paper, I'd like to focus on how people have struggled to survive through all the hardships with the power of prayers and the wisdom to find a way out of their difficulties.

マレットのメンテナンスによる 音色創りの提案

— 音楽的感性の育成をめざして —

A Proposal for Creating Timbre through Mallet Maintenance

— Aiming to nurture musical sensibility —

京都文教短期大学 岩佐 明子

Kyoto Bunkyo Junior College IWASA Akiko

1. はじめに

平成 29 年 3 月 31 日に改訂・告示され、平成 30 年 4 月 1 日に施行された「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の領域「表現」には、それぞれ「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。[文部科学省、2017、p.20]、[厚生労働省、2017、p.21、p.29]、[内閣府、文部科学省、厚生労働省、2017、p.24、p.31]」と明記されている。また、感性について記述された条文は、「生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。[厚生労働省、2017、p.21]、[内閣府、文部科学省、厚生労働省、2017、p.24]」、「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。[文部科学省、2017、p.20]、[厚生労働省、2017、p.29]、[内閣府、文部科学省、厚生労働省、2017、p.31]」があり、幼児の感性を養うことの重要性が記されている。

更に、智原らの調査によると、「保育者に表現活動を指導する際に、保育者の資質として重要だと思われる 6 項目をあげ、その重要度を尋ねた結果、身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな『感性』と回答した保育者が 1 番多かった。[智原、2015、p.123]」という報告がなされており、現在、保育に携わっている保育者自身も、豊かな感性が必要と考えていることが分かる。

これらのことから、保育者養成課程においても、子どもの様々な表現を理解し受け止め発展させていくことのできる感性や表現力を育む指導内容が求められている。

筆者は、保育者養成校において、打楽器アンサンブルを卒業研究のテーマとするゼミナールを展開している。ゼミナール所属学生の音楽的感性を育むために、楽器の演奏技術を習得することのみに偏重しないよう配慮し、楽器の音色に関心を持つことも活動の大きな目的としている。

現在、保育及び教育現場で使用されている打楽器は多岐に渡り、ゼミナールでも様々な打楽器を用いている。本研究では、それらの打楽器の中から、マレットの選択によって、多彩な音色を表現できる鍵盤打楽器を用い、音色の違いに着目する「音を聴く」活動を展開したいと考えた。

鍵盤打楽器の演奏において、マレットの選択は音色を決定づける重要な要素であると考えられている。マレットは消耗品であるが、鍵盤を垂直に打鍵する正

しい演奏方法で用いた場合、長期間の使用に耐えられるものである。しかし、打楽器経験の少なく適切なトレーニングを積んでいない学生は、垂直に打鍵することが難しいため、マレットの打面が短期間で傷み、使用できない状態になる。保育及び教育現場においても、子どもが垂直に打鍵していない可能性に加え、経年劣化のため、表面の毛糸や綿糸がすり切れた状態にあるマレットが用いられていることが多い。このようなマレットでは、鍵盤打楽器が持つ本来の音色を引き出すことは難しいのではないだろうかと考える。保育及び教育現場では、子ども向けの軽い教育用マレットが用いられていることが多いため、これらのマレットのメンテナンス方法を探り、より良い「音を聴く」活動に繋げたいと考えた。

本研究は、傷んだ市販のマレットのメンテナンスを行い、本来持っていた音色の再現の可能性を探る。また、学生がメンテナンスされたマレットの音を聴き分け、独自に設定した基準に沿って分類する。その上で分類する過程をとおして、学生が「音を聴く」ことに関して、どのような気づきがあったかを検証することを目的とする。

2. 選択した楽器について

現在、保育・教育現場で使用されている鍵盤打楽器は、マリンバ、シロフォン等の木琴や、ヴィブラフォン、グロッケン等の鉄琴、オルフ楽器等がある。本研究では、音板楽器の中で最も広い音域を持ち、マレットの選択により多彩な音色を表現できるマリンバを取り上げる。

2-1. 木琴について

マリンバは木琴の1種であるため、木琴について概観する。木琴は次のように定義されている。「発音体に木、竹、あるいは合成素材の音板を用いて、音列の順に並べた打楽器。」[岡田、1995、p. 377] また、次のように解説されている。「音板の材質は、最高級の紫檀（もしくは、同様の響きと耐久性を持つ木材）かケロンやクリペロンといった強化合成樹脂である。（中略）音板は、硬いマレットでたたくと明るく通る音を出し、柔らかいばちを使うと丸みのある音になって、特に低音に適する。（中略）起源は定かではない。最も古いものは14世紀にさかのぼり、木琴分布の2大主要地域であるアフリカとインドネシアから見つかった。」[岡田、1995、p. 377]

木琴は、その発源地域により多種多様であるが、筆者が確認できたアフリカとアジアの数例を挙げる。

まず、アフリカにおける木琴を示す。瓢箪の共鳴器が付いているものとして「音階のついた木片の下に、それぞれ共鳴器のひょうたんが付いている」[高橋、2002、p. 41] コンゴ民主共和国のバラフォンや、ブルキナファソのパロ（大阪音楽大学楽器資料館所蔵）がある。また、共鳴器が付いていないものとして、コートジボワールのバラ（大阪音楽大学楽器資料館所蔵）がある。

次に、アジアにおける木琴を示す。音板の下に舟形の音響箱が付いているものとして、タイ王国のラナート・エク、ラナート・トゥム（民音音楽博物館所蔵）と、日本の木琴がある。ここで指す日本の木琴とは、現在のものとは違い「中国の明清楽によって伝えられたものだ」という。歌舞伎の下座音楽にも用いる」[網

代他、1994、p. 310] ものである。前述の定義により、音板が竹の楽器も木琴とするのであれば、「1人1台で20台ほど並べ、数十人で演奏される」[高橋、2002、p. 40] インドネシアのジュゴグや、フィリピン共和国のクリンタン（民音音楽博物館所蔵）も挙げる事ができる。

2-2. マリンバについて

前述したアフリカで発生した木琴の内、「チョピ族の木琴は瓢箪を共鳴体とした杵を持つ例で中央アフリカに伝わり、後にはヨーロッパでマリンバに発展した」[岡田、1995、p. 378] とされ、マリンバの起源がアフリカであることが示されている。よって、現在、日本で保育及び教育現場やオーケストラで使用されているマリンバ、シロフォン等は、アジアで発生したものではなく、アフリカからアメリカ、ヨーロッパ経由で開発されたものを起源としていることが分かった。

3. 方法

3-1. 調査対象者

A 短期大学幼児教育学科 打楽器アンサンブルを卒業研究とするゼミナール
選択者 2年生 9名。

3-2. 調査時期

2018年6月～8月 音の分類調査を1回につき90分計4回行い、第5回目にアンケート調査を実施した。

3-3. 音の分類調査

3-3-1. 使用楽器

マリンバ (B社、音域：F5-C8)

3-3-2. 使用マレットの芯と毛糸の素材

市販されている幼児対象の教育用マレット4種類 (C社製) の打面を覆う毛糸を除去し、中心部にある芯を使用した。これらのマレットの芯は、ハード、ミディアムハード、ミディアムソフト、ソフトの4種類である。芯に巻く毛糸の素材は、アクリル100%、ウール100%、メリノウール100%の3種類とした。毛糸の太さは、極細、中細、合太、並太、極太、超極太の6種類である。但し、アクリル100%のみ、入手不可能であった合太を除く5種類である。

3-3-3. マレットの打面の貼り替え方法

- (1) マレットの毛糸を全て取り除く。
- (2) 打面を避け芯の上部と下部に、
毛糸を固定するためのフェルトを貼る。
- (3) 毛糸を芯全体に30回巻き、それを2回くり返す。
芯、毛糸の素材、毛糸の太さに差異がある
計68種類のマレットを製作した。

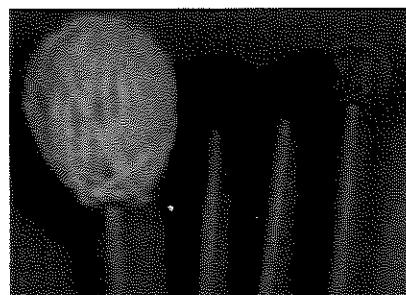


図1 貼り替えたマレット

3-3-4. 調査方法

打楽器経験を6年有する学生1名が、打面を貼り替えたマレットを用い一定の強さで打鍵し、打鍵者を含めた9名の学生が音の種類を聴き分け分類した。なお、音域による差異を考慮し、低音(C3-B4)と高音(C5-C7)に分け調査を実施した。

3-3-5. 音の分類基準

マリンバが既に調律されている楽器であるため、音の三要素「強さ・高さ・音色」の「高さ」は分類の基準から除外した。また、本研究では音の種類を聴くことに主眼を置くため、「音色」を「硬さ」と「響き」の2項目のカテゴリーに分け、より詳細に判断する。

音の種類は、「強さ」、「硬さ」、「響き」の3項目に分類し、各項目を3段階で評価した。音の「強さ」、「硬さ」は打鍵した瞬間の音を判断し、「響き」は打鍵した瞬間の音ではなく、その後の余韻の長さや響きの豊かさで判断した。

なお、「強さ」のレベルを示すdBや、「音色」の判断に一般的に使用されているスペクトル分析を用いると、より正確な結果が得られると推測する。しかし、本研究では耳で聴き判断することに重点を置くため、これらの測定方法は用いない。

3-4. 音の分類調査に関するアンケート調査

3-4-1. 調査内容

調査内容は、マレットの音の分類調査に関する以下の項目である。①音の聴き取り調査で気付いたことや感想、②音の聴き取り調査で難しいと感じたこと、③演奏で使いたくないマレットとその理由、④③で選択したマレットの演奏以外に保育で使用する方法、⑤好きな音のマレットとその理由の5項目である。理由は全て自由記述で回答させた。本研究では、①、②、④の回答内容をKJ法で分析し考察する。

3-4-2. 調査方法

質問紙を使用したアンケート調査を実施した。回収率は100%であった。

3-4-3. 倫理的配慮

調査対象者には、アンケート調査の回答は任意であり授業の評価とは無関係であること、回答者の個人を特定しないものであること、教育・研究の目的以外には使用しないことを文書で説明した。

4. 結果及び考察

4-1. マリンバを打鍵した音の分類マップ

縦軸を「硬さ」、横軸を「強さ」、「響き」を色の濃淡で示し、毛糸の種類、毛糸の太さ、芯の種類が一目で見て取れる音の分類マップを考案した。表1と表2は、打面を貼り替えた様々な種類のマレットでマリンバの低音域(C3-B4)と高音域(C5-C7)を叩き、聴き分けた音の分類を示したマップである。

表2 高音域を打鍵したマレットの音の分類マップ

		響き															
		強い					普通					弱い					
		硬い		普通			強い		硬い		普通			弱い			
		極細		中細			極細		中細		極細			中細			
強い	アクリル100%																
	ウール100%																
	メリノウール100%																
普通	アクリル100%																
	ウール100%																
	メリノウール100%																
柔らかい	アクリル100%																
	ウール100%																
	メリノウール100%																
硬さ	アクリル100%																
	ウール100%																
	メリノウール100%																
	毛糸																
	芯																
		強い					普通					強い					

4-2. 市販されているマレットの再現性

打面を貼り替えたマレットの中から、教育用マレット4種類（C社製）と、音の「強さ」、「硬さ」、「響き」が最も近いマレットの毛糸の種類及び太さを以下に示す。これらのマレットで叩いた音は、低音、高音ともに市販されているマレットとほぼ同じであった。芯は、貼り替える前のマレットと同じ種類を使用した。保育及び教育現場において、市販されているマレットの表面の毛糸がすり切れた場合、同じ音を持つマレットにメンテナンスできることが分かった。

表3 市販されているマレットと音の「強さ」、「硬さ」、「響き」が最も似ているマレット

貼り替える前のマレットの芯	貼り替えた毛糸の種類と太さ	
	種類	太さ
ハード	メリノウール 100%	並太
ミディアムハード	ウール 100%	合太
ミディアムソフト	アクリル 100%	中細
ソフト	アクリル 100%	中細

4-3. アンケート調査の分析結果と考察

4-3-1. 音の聴き取り調査で気付いたことや感想

音の聴き取り調査で気付いたことや感想に対する、自由記述の回答をKJ法で分析した結果、以下の7項目に分類された。①「マレットによる音の違いに気付いた（8件）」が最も多く、毛糸の種類や太さによる違いや、同じマレットでも音域により差異が出ることに気付いた記述があった。②「マレットの音を聴き分けることは大切だと気付いた（6件）」では、曲に合わせてマレットを選択する必要があることに気付いたことや、良い音を出すことを追求しながら演奏に取り組みたいなど、高度な演奏をしたいという意欲が見られた。③「様々なマレットがあることを知り楽しかった、面白かった（5件）」では、多くのマレットの音を聴き触れることができ楽しかったなど、調査自体を興味深く感じた様子が覗える。④「音の聴き分け、マレットの選択は難しい（3件）」は「響き」の聴き分けが難しかったこと、低音域と高音域それぞれ良いと感じる音があり判断に迷ったことや、各学生の意見が異なった時の判断が難しいなどの記述があった。⑤「マレットを創れることを発見した（2件）」では、毛糸や芯の硬さを理解することによって、好みのマレットが創れることを驚きとともに捉えている。また、⑥「マップ化はすごい（1件）」、⑦「他の楽器に使用できる（1件）」があった。

4-3-2. 音の聴き取り調査で難しいと感じたこと

音の聴き取り調査で難しいと感じたことに対する、自由記述の回答をKJ法で分析した結果、以下の5項目に分類できた。①「響きの聴き分けは難しい（7件）」では、「強さ」や「硬さ」は判断しやすいが、「響き」を聴き分けることが難しかったとあった。②「響きの聴き分けが難しい理由（7件）」として、「響き」を聴く上で「硬さ」や「強さ」に惑わされてしまうとあった。③「実験上の問題点（7件）」として、何度も聴いていると集中力が切れる、友人の意見を聞くと分から

なくなる、音を聴く位置、場所、人によって聴き方の違いがあるなど、被験者側の問題点が挙げられた。④「各項目を3段階に分類することが難しい(3件)」では、段階の境にあるマレットの分類が難しい、分類の基準が2段階では判断しやすいが3段階となると各段階の基準となるマレットがないと難しいという記述が見られた。⑤基準となるマレットに関しては、学生が調査を進める中で、日数が経過すると「強さ」、「硬さ」、「響き」の3段階が判断できなくなったため、学生の発案で各段階の基準となるマレットを決め、そのマレットと比較しながら分類を最初からやり直しており、調査における工夫が見られた。

4-3-3. 演奏で使いたくないマレットを保育で使用方法

演奏で使いたくないマレットを保育で使用方法に対する、自由記述の回答をKJ法で分析した結果、以下の5項目に分類できた。①「遊びに使用できる(10件)」が最も多く、見立てあそび、ごっこあそび、音あそびなどが挙げられた。②「他の楽器に使用できる(9件)」では、大きなマレットは太鼓やシンバルに、「硬い」マレットはウッドブロック、シロフォン、グロッケンに、その他は、木魚や、サスペンデッドシンバル、クラッシュシンバルに使用できると記述があり、ゼミナールで使用している様々な打楽器が挙げられた。③「効果音・BGMに使用できる(4件)」では、「響き」が「豊か」で「弱い」マレットは、絵本の読み聞かせの静かな場面の効果音やBGMに使用できる、不気味な音の効果音に使えるという記述があった。④「楽器以外のものを叩いて鳴らす(2件)」では、バケツ、缶、フライパンなどを叩くことが挙げられた。⑤「音の要素以外に使用(2件)」では踊りを踊る時の手具に使用するや、握る、振って力を付けるなどユニークな回答も見られた。学生は、様々なマレットに触れ音を聴きその特性を理解することにより、演奏には使用できないものでも、何らかの形で保育の現場で使用出来る可能性を見出すことができたと考える。

4-4. 調査の過程における学生の反応

学生の聴き取り調査を観察する中で、以下の学生の反応がみられた。

まず、聴き取り調査を進める中で、学生は「私たちは、「響き」が「硬い」マレットの音は「強い」と、「響き」が「柔らかい」マレットは「弱い」と判断していることが多い。」という意見が多く出された。つまり、硬い音は強く、柔らかい音は弱いと感じる傾向にあると気づき、自分たちが音色を判断する時の基準について「響き」と「強さ」が関係しているのではないかと、共通に理解が進んだ。

筆者が完成後の音の分類マップを確認すると、低音域、高音域ともに「柔らかい」マレットで「強い」、「硬い」マレットで「弱い」と判断されたマレットは皆無だった。そのため、音の「硬さ」と「強さ」を相互に関連させて聴いていることが分かった。

また、自分たちが演奏する時のことを想定し、「音色が好みのマレットの中から、演奏で使用する時にちょうど良い重さのマレットや、打ちやすい形のマレットを使いたい。」との発言があった。音色とともに重さや打面など演奏時に使いやすいと考えられるマレットの形状にも関心を持っていた。

また、音の分類マップの基準は、「硬さ」、「強さ」、「響き」の3項目のみであったが、音色について以下の様々な発言があり、音の感じ方について意見交換を行っていた。

マレットの低音域において、毛糸の太さの極太を使用した重く大きなマレットは、他のマレットと比較するとかなり余韻が長いため、「強い音ではないけれど、ぼわーっとした音が長く続き面白い」、「重いのでテンポが速い曲には向かないが、ここという時の1音に良いのでは」、「柔らかい音の持続音が欲しい時に良い」という発言があった。

また、「硬い」と判断されたマレットの中で、芯がハード、毛糸の太さが極細のものを表現する言葉として、「きつい音」、「痛い音」、「鋭い音」、「芯のむき出しの音」が挙げられた。それ以外で「硬い」と判断したマレットの音を表現する言葉として、「音の粒がはっきりする」、「芯のある音」、「カツカツした音」、が挙げられた。

その他、音色について「やさしい音」、「深くて丸い音」、「ふわっとした音」、「可愛らしい音」、「こもる音」と表現していた。また、音色に加え見た目や触り心地の感触にも触れ、「しましまの見た目で蛇のよう」、「柔らかいぼんぼん」、「ソフトクリームみたい」と発想をふくらませていた。

このように、「音を聴く」、判断する活動をとおして、音に対する感じ方を自分の言葉で表現し他者に伝え、イメージを共有している様子が伺えた。

5. まとめと今後の課題

学生が主体となり、音を聴き判断することを目的とし分類を行った結果、学生自身が楽器の音を聴くことや鍵盤打楽器におけるマレット選択の重要性に気付くことができたと考える。また、音を聴き分ける過程の意見交換において、様々なマレットが奏でる音の聴き方を他者と共有、音を言葉で表現することにより新たな発見をしている姿が見られた。

本研究において、市販されている教育用マレットをメンテナンスにより再現できることが分かったことは、大きな収穫であった。今後、再現したマレットを演奏で使用し、市販されているマレットと耐久性の比較も行いたい。

また、簡単にメンテナンスできることが分かったことで、保育及び教育現場でこれらのマレットを自由に使用する音楽遊びを提案したい。マリンバ以外の鍵盤打楽器、太鼓類、楽器以外の教室にあるもの、戸外の自然のものを打った時の音色や、その活動をとおして子どもがどのように感性を豊かにしていくかを探りたいと考えている。

付記

本研究は、全国大学音楽教育学会中部地区学会平成28年度後期研究大会、日本保育学会第71回大会において研究発表した内容をもとに、新たな知見を付加し、再構成したものである。

引用文献

網代景介・岡田知之、1994年、『新版 打楽器事典』、音楽之友社

智原江美・鍋島恵美・和田幸子・下口未帆・田中滋子、2015年、「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方ー京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討ー」、「京都光華女子大学研究紀要」第53号、p.123

厚生労働省、2017年、『保育所保育指針』、フレーベル館、p.21、p.29

文部科学省、2017年、『幼稚園教育要領』、フレーベル館、p.20、

内閣府、文部科学省、厚生労働省、2017年、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館、p.24、p.31

岡田知之、1995年、『ニューグローヴ世界音楽大事典』第18巻、講談社

高橋秀雄、2002年、『日本の楽器日本の音1打楽器』、小峰書店

謝辞

本研究に興味を持ち、参加して下さったゼミナール所属学生に心より御礼申し上げます。

A Proposal for Creating Timbre through Mallet Maintenance - Aiming to nurture musical sensibility -

Kyoto Bunkyo Junior College IWASA Akiko

There is currently a need in nursery school caregiver training courses for instructional content that nurtures rich musical sensibility and expression. In this study, we replaced the striking surface of commercially available mallets and created a variety of diverse mallets. Using these mallets, we conducted "sound listening" activities to determine the types of sounds of keyboard percussion instruments, with the purpose of engaging students' interest in timbre. Following this, we conducted a questionnaire survey concerning what listeners noticed during the "sound listening," and analyzed and examined the findings.

日本の季節区分（歌謡曲・唱歌・民謡・文学作品）が表現する季節

Season to Japan of season Classification (popular song, songs, folk songs
And literature works) to express

気象予報士 富沢 勝

Certificated weather forecaster

TOMIZAWA Masaru

1. はじめに

本報告は、筆者が長年仕事の上で調べた、暦と季節のかかわりを縦系に日本の民謡や唱歌、歌謡曲、文学作品などを横系にして織り込んだ内容となっている。日本の季節は、春夏秋冬と四季で代表されるが、それぞれの季節にふさわしい言葉、表現、それを唱歌や日本民謡、歌謡曲、日本文学などでわかりやすく解説しようとしたものである。

日本にはそれぞれの季節にふさわしいたくさんの言葉が、和歌や俳句、文学作品、そして民謡、唱歌、歌謡曲(流行歌)などに表現されてきた。数限りない季節の言葉や歌、文学、和歌、俳句があり、とても全てを紹介できるものではないが、そのごく一部を紹介する。

2. 二十四節気および雑節

温帯地域がほとんどの日本列島は、春夏秋冬の四季がある。(梅雨を入れて五季という説もある)気象庁では春は3~5月、夏は6~8月、秋は9~11月、冬は12月~2月と決めている。今の暦以前は太陰暦で、閏月もあって暦と季節は必ずしも一致していなかった。そこで人々は二十四節季によって季節の推移を実感していた。

ここで、二十四節季とは何か説明する。元は古代中国の黄河中流域で決められた陰暦の季節区分である。太陰暦の一年を太陽の黄経に従って二十四等分し、各区分点の日にその季節を表す呼称をつけたものであり、日付は、年によって若干前後する。おおよそ15日毎に小寒→大寒→立春→雨水→啓蟄等と季節が進んでいく。表-1に国立天文台のホームページから「二十四節気および雑節」を引用する。

季節の推移は吉田兼好の徒然草 155 段等や明治時代の自然主義文学の国木田独歩の「武蔵野」あたりが一つの参考になるのではないかと考えられる。徒然草 155 段では「春暮れて後、夏になり、夏はてて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の氣をもよほし、夏より既に秋はかよひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。

木の葉のおつるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下に設けたる故に、待ちとるついで甚だはやし」

表 1、二十四節気および雑節(2019)

二十四節気および雑節 平成31年(2019)

名称	太陽黄経	中央標準時		名称	太陽黄経	中央標準時	
小寒	285度	1月06日	0時39分	寒露	195度	10月08日	23時06分
大寒	300度	1月20日	18時00分	霜降	210度	10月24日	2時20分
立春	315度	2月04日	12時14分	立冬	225度	11月08日	2時24分
雨水	330度	2月19日	8時04分	小雪	240度	11月22日	23時59分
啓蟄	345度	3月06日	6時10分	大雪	255度	12月07日	19時18分
春分	0度	3月21日	6時58分	冬至	270度	12月22日	13時19分
清明	15度	4月05日	10時51分				
穀雨	30度	4月20日	17時55分	土用	297度	1月17日	19時15分
立夏	45度	5月06日	4時03分	節分		2月03日	
小満	60度	5月21日	16時59分	彼岸		3月18日	
芒種	75度	6月06日	8時06分	土用	27度	4月17日	16時14分
夏至	90度	6月22日	0時54分	八十八夜		5月02日	
小暑	105度	7月07日	18時21分	入梅	80度	6月11日	13時32分
大暑	120度	7月23日	11時50分	半夏生	100度	7月02日	12時31分
立秋	135度	8月08日	4時13分	土用	117度	7月20日	8時23分
処暑	150度	8月23日	19時02分	一百十日		9月01日	
白露	165度	9月08日	7時17分	彼岸		9月20日	
秋分	180度	9月23日	16時50分	土用	207度	10月21日	1時57分

出典:国立天文台 HP より

国木田独歩の「武蔵野」は「武蔵野のおもかげは今、わずかに入間郡に残れり」で始まる小説である。この中で、独歩は明治29年の秋の初めから翌春の初めまで、渋谷村(今の東京渋谷区)の小さな茅屋に住んでいた時の日記の描写である。秋の初め9月7日のところは以下のような表現である。

「昨日も今日も南風強く吹き雲を送り雲を払いつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるととき林影一時に煌(きら)めく」中略、11月4日「天高く気済む、夕暮れに独り風吹く野に立てば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色漸く至り、林影漸く遠し」数日おきに描写が翌春まで続く。この項の最後のところは、3月21日で「春や襲いし、冬や遁れし」であった。

表2、 気圧配置型の季節区分 (1941-1970) (吉野・甲斐, 1977)

初春	3月 1日~3月 11日	17日間
春	3月 18日~5月 4日	48日間
晩春	5月 5日~5月 21日	17日間
初夏	5月 22日~6月 10日	20日間
梅雨	6月 11日~7月 16日	36日間
夏	7月 17日~8月 7日	22日間
晩夏	8月 8日~8月 20日	13日間
初秋	8月 21日~9月 11日	22日間
秋雨	9月 12日~10月 9日	28日間
秋	10月 10日~11月 3日	25日間
晩秋	11月 4日~11月 25日	22日間
初冬	11月 26日~12月 25日	30日間
冬	12月 26日~1月 31日	37日間
晩冬	2月 1日~2月 28日	28日間

気象学者の吉野正敏氏と甲斐啓子氏が天気図の気圧配置を30年間分にわたって気圧配置型を決定し、それを調べて14の季節区分に分類したものを「日本文学と気象」1978年(中公新書)より引用して示す。

次に季節にまつわる歌を挙げて

みる。

“春の歌”

「おぼろ月夜」 文部省唱歌 1914(大正3)年 詞 高野 辰之 曲 岡野 貞一

菜の花畠に 入日薄れ 見わたす山の端 かすみ深し
春風そよ吹く 空を見れば 夕月かかりて においあわし

里わの火影も 森の色も 田中の小道を たどる人も
蛙のなくねも 鐘の音も さながらかすめる おぼろ月夜

“夏の歌”

「八十八夜」

立春から88日目。陽暦の5月1日か2日にあたり、播種の適期とされる。茶どころでは茶摘みの最盛期となる。昔から「八十八夜の別れ霜」とか「忘れ霜」とかいて、おそ霜は農家にとって恐ろしいものとされている。この頃が最後の霜であり、北海道や本州の山岳地帯を除けば、これ以後は霜が降りない。

「茶摘み」 文部省唱歌 1912(明治45)年

夏も近づく八十八夜 野にも山にも若葉が茂る

あれに見えるは茶摘みじゃないか あかねだすきに菅の笠

日和つづきの今日此頃を 心のどかに摘みつつ歌う
摘めよ摘め摘め摘まねばならぬ 摘まにや日本の茶にならぬ

「懶（ものう）げな雨」

「物憂し」は気が進まない、こころが晴れないなどの意味。「懶惰」（らんだ）の懶の字をあてていることから、倦怠感のある、うんざりしたようないやいやながら、といった気分を含むのであろう。（「四季のことば辞典」より）

梅雨前半の陰鬱なシトシト雨のような感じだろうか。

「どうぞこのまま」 1976(昭和51)年 丸山 圭子 詞・曲・歌

この確かな時間だけが 今の二人に 与えられた
唯一の あかしなのです ふれあうことの喜びを
あなたの ぬくもりに感じて そして 生きているのです
くもりガラスを 伝わる 雨のしずくのように
ただ ひとすじに ただ ひとすじに ただ ひとすじに

それは ばかげたあこがれか
気まぐれな 恋だとしても
雨は きっと 降り続く
くもりガラスを たたく 雨の音 かぞえながら

* どうぞ このまま どうぞ このまま
どうぞ やまないで

さよならは 涙とうらはら
さめたコーヒーの ようなもの
だから いつまでも このまま
米印2回くりかえし

「山小屋の灯」 1947(昭和22)年 米山 正夫 詞・曲 近江 俊郎 歌

たそがれの灯は ほのかに点りて 懐かしき山小屋は 麓の小路よ
思い出の窓により 君を偲べば 風は過ぎし日の 唄をばささやくよ

暮れゆくは白馬か 穂高はあかねよ 樺の木のほの白き 影もうすれゆく
さびしさに君呼べど 我が声空しく 遙か谷間より こだまは帰り来る

山小屋の灯は 今宵も点りて 独り聴くせせらぎも 静かにふけゆく
あこがれは若き日の 夢をのせて タベ星のごと み空に群れ飛ぶよ

“秋の歌”

9月1日は「二百十日」(雑節)「防災の日」

9月は、始めはまだ残暑の厳しい日々もあるが、中旬頃からは秋雨前線が本州の南岸付近に停滞し、秋の長雨シーズンに入り気温も下がってくる。そして、秋の彼岸を過ぎる頃から、秋の気配が色濃くなってくる。

二百十日～雑節のひとつ。立春から数えて210日目頃で、9月1日ごろにあたる。(2019年は9月1日)このころは米作りの上で重要な稲の開花期であり、台風の影響を恐れて、農家では厄日として警戒してきました。しかし、米作りの技術が進み、稲の開花はかなり早くなっています。また統計的にも二百十日前後に台風が多いという事実はなく、大型の台風は9月16～17日や26～27日に多く来襲している。(但し、東京の最大瞬間風速は1938(昭和13)年9月1日の台風)

「おわら風の盆」富山県婦負郡八尾町(今は富山市) 9月1日～3日

北陸・富山に初秋の訪れを告げる祭りである。八尾町では9月1日～3日までを「風の盆」と呼ぶ。二百十日の台風封じ、風を和らげる祈願をして、五穀豊穰を祈る。町民は民謡「越中おわら節」を歌い、哀調豊かな胡弓や三味線の調べに合わせて3日3晩踊り明かす。数千のぼんぼりに灯がともる中で、踊り手たちが影絵のように浮かび上がる。町全体が幻想的な雰囲気包まれる。昨今は、優雅な舞いを一目見ようと全国から観光客が殺到し、町は対策に頭を悩ませているという。(共同通信「ニュース予定」より)

風に対する日本人の関心や知識が、時代とともにどのように変化して今日にいたったかを、史料に基づいて、気象学の立場から回顧した名著「日本の風」(田口 龍雄著 昭和37年6月30日発行 東京都千代田区竹平町気象庁内 財団法人 気象協会)によれば「各種の異常な状態などに着目する方法ではなくて、特に荒天の起り易い、いわゆる特異日を知って予知に利用しようとの試みもあった。最も広く一般に知られたものは二百十日で、その起源などについても諸説はあるが、米作の豊凶に最も関連の多い時期の大風として重視されたのであろう(風祭)。二百十日の外に、二百二十日や八朔(陰暦8月1日)を「風の厄日」と称して、大いに警戒したものである(甲子夜話)。

二百十日前後に大風の吹かない年もあって、これは夏の土用になってから度々風雨のあるような年とか、初秋以来、毎晩北風の卓越する年に多いとされているが(全流舟軍之巻)。「二百十日がなしくずしになった」(森 鷗外、雁)などと言うのと関連がありそうにも思われる。

いわゆる厄日の天候が、米相場に大いに影響して、悲喜こもごもの事件を起した物語は近代にも求められるが(幸田 露伴、風流微塵蔵)、この日が無事平穩に過ぎる事は農

家にとっては、大きな歓喜であった。

越中八尾はおわら節の名所であるが、二百十日を「風の盆」（盆は休日の意味）と称し、町を挙げておわら踊りを楽しむ。

二百十日に風さえ吹かにはや 早稲の米食て踊ります（越中おわら節、日本民謡集）

特殊な風祭のための社寺が創建された例もある。富山県下にはこの種の御堂（俗に「吹かぬ堂」と言い大風の吹かぬように祈る御堂の意味）が十数箇所があり、特に今、級長戸辺神社（東砺波群南山田村是安）と称しているものは、寛文二年（1662）の創建と伝えられる（伏木測候所気象雑篇）。これらの「吹かぬ堂」の中には仏教に由緒を持つものもあるが、いずれも局地的強風（南より）の卓越する地帯に分布している。

風神を信仰の対象としてではなく、芸術上の素材として取り上げた傑作としては、俵屋宗達の風神雷神図（世界美術全集、二十一巻）彫刻では三十三間堂の風神雷神像（日本国宝全集、二十六輯）などは、いずれも国宝である。

それらの風神は風の袋を背負っており

風の神 背中を流す 姿なり（柳尊）

と川柳子は詠んだ。

箱根に風祭という地名（登山鉄道の駅名にある）があり、享和の頃（1801）は箱根越えの休息所であったらしいが、（改元紀行）実際に風祭が行われたかどうか、適当な史料を見出し得なかった。

「越中おわら節」 富山県民謡「日本民謡集」岩波文庫より
この民謡の起源については諸説ある。

「前囃子」 歌われよ わしゃ囃す

来たる春風 エー氷が解ける（キタサノサーアー ドッコイサノサッサ）

うれしや気ままに オワラ開く梅

「後囃子」 三千世界の松の木ア枯れても あんとと添わなきや娑婆へ出た甲斐がない

（キタサノサーアー ドッコイサノサッサ）

（古調）

あいや可愛いや いつ来て見ても

たすき投げやる 暇がない

たすき投げやる 暇あるけれど

あなた忘れる 暇がない

山へ登れば いばらが止める

いばら離しやれ 日が暮れる

お前ひとりか 連衆はないか

連衆アあとから 駕籠で来る

ホッとため息 小粋をながめ

こうも糸嵩 ないものか
盆が近うなりや 紺屋へ急ぐ
盆の帷子 白で着しょう
あねまどこへゆく 餅草摘みに
おらも生きたや びくさげて
二百十日に 風さえ吹かにや
早稲の米食て 踊ります
殿まと旅すりゃ 月日を忘れ
鶯鳴くそな 春じゃそな

(新調)

八尾よいとこ 蚕の都
秋は野山も 唐錦
城ヶ山から 白帆が見える
二つ三つ四つ 有磯海
若しや来るかと 窓押しあけて
見れば立山 雪ばかり
八尾坂道 別れて来れば
露か時雨か ハラハラと
八尾おわらを しみじみ聴けば
昔山風 草の声

(後囃子)

浮いたか瓢箪 軽そに流れる
行くさきア知らねど あの身になりたい
越中で立山 加賀では白山
駿河の富士山 三国一だよ
来られた来られた ようこそ来られた
来られたけれども 我が儘ならない
南蛮鉄のような 豪傑さんでも
あんたにかけては 青菜に塩だよ
七合と三合は どこでも一升だよ
一升と定まりゃ 五合拵いらぬ

「小春日和」

小春のころの暖かい日和。なお、小春とは（暖かで春に似ているからいう）陰曆

10月の異称である。(「広辞苑」より)

陰暦の10月は陽暦では大体11月から12月上旬に当たる。この頃はもう寒くなり、風が冷たく感じられる。ところがこの時期に暖かで穏やかで春を思わせる陽気になることがあり、これを小春日和と呼ぶ。(「空の名前」高橋健司著・写真 光琳社出版より)

天気図を見ると移動性の高気圧型になっていて、しかもその高気圧が、中国南部からの南方コースのものであったりする。高気圧が南に下がっていく途中、暖められた空気の塊が、日本へやって来るため、わずか1日くらいしか続かないが、風静かな暖かい天気が見られるのである。

平年では小春日和は11月に3~4回、12月に1~3回くらい出現している。小春日和の最高気温は、全国的に平年より3~4度高いことが多く、軽井沢で15度、東京で20度に達することもある。日なたぼっこに最適の日和だ。かあさん、縁側、肩たたき、猫の昼寝、陽がいっぱい、それが小春日和の風景である。(「カラー気象歳時記 山溪カラーガイド」より)

「千曲川のスケッチ」 島崎 藤村 著、岩波文庫より 1943(昭和18)年1刷
最初の発表年は1911(明治44年)6月「中学世界」に連載、作者39歳

「小六月」

気候は繰り返す。暖かな平野の地方ではそれほどきわだって感じないようなことを、ここではせつに感ずる。寒い日があると思うと、またばかに暖かい日がある。それからまたいっそう寒い日が来る。いくら山の上でも、一息に冬の底へ沈んではしまわない。秋から冬になるころの小春びよりは、この地方での最も忘れがたい、最もここちのよい時の一つである。俗に「小六月」とはその楽しさを言いあらわした言葉だ。

「小春」 国木田 独歩 著 新文学書房より 1967(昭和42)年

最初の発表年は1900(明治33)年12月、『中学世界』 作者29歳

「一年の熱去り、気は水のごとく澄み、天は鏡のごとくに磨かれ、光と蔭といよいよ明らかにして、いよいよ映照せらるるとき」である、気が晴々する、うちにもどこか引き緊るところがあって心が浮つかない。断行するにも沈思するにも精一ぱい出来る。感情も意思も智力もその能を尽くすべき時である。冬はいじけ春はだらけ夏は瘦せる人でも、この季節ばかりは、健康と精力とを自覚するだろう。それで季節が季節だけに自分のオーズオルス詩集に対する心持がやや変って来た、少しはしみりと詩の旨を味わうことが出来るようである。自分は南向きの窓の下でガラス越しの日光を避けながら、ソネットの二三編も読んだか。...

「秋桜」 1977(昭和52)年 さだまさし 詞・曲 山口百恵 歌

淡紅のコスモスが秋の日の 何気ない陽溜りに 揺れている
此頃 涙脆くなった母が 庭先でひとつ咳をする
縁側でアルバムを開いては 私の幼い日の思い出を
何度も同じ話くりかえす 独言みたいに小さな声で
こんな小春日和の穏やかな日は あなたの優しさが浸みてる
明日嫁ぐ私に 苦勞はしても
笑い話に時が変えるよ 心配いらないと 笑った

あれこれと思い出をたどったら いつの日もひとりでは なかったと
今更乍ら 我まな私に 唇かんでいます
明日への荷造りに手を借りて しばらくは楽し気にいたけれど
突然 涙 こぼし 元気でと 何度も何度も くりかえす母
ありがたいの言葉をかみしめながら 生きてみます 私なりに
こんな小春日和の穏やかな日は もう少しあなたの
子供でいさせて下さい

“冬の歌”

「天気(境)界」冬には降水があるところとないところの境界(天気界)がはっきりしている。天気界は日によって変動するが、清水トンネルのある三国山脈は、いつも決まって天気界になりやすい。(「衛星でみる日本の気象」 岩波書店)より)

この峠の表裏の気候の差は上越国境の山脈が北東から南西に連なり、北西の季節風をほぼ直角に遮断していることによって形成されたものである。日本海上を吹き渡ってきた季節風のもってきた水分は、この国境山地の風上側にドカ雪となってほとんど落とされてしまう。山地を吹き越えた雲の南端は、分水嶺を越え水上付近まで達し、小雪を降

らせはするがその南は快晴、冬枯れの関東平野へと続くのである。ここは日本でも天気界がいちばんはっきりしているところである。(山溪カラー「気象歳時記」より)

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽が止まった。向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れ込んだ。娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように「駅長さあん、駅長さあん。」明かりをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻きで鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうち

に闇に呑まれていた。:

(「雪国」川端康成 著 新潮文庫より)

「雪国」 作詞・作曲・歌 吉 幾三 1986(昭和 61)年

好きよあなた今でも今でも 暦はもう少しで今年も終わりですね

* 逢いたくて恋しくて泣きたくなる夜

そばにいて少しでも話しを聞いて

追いかけて追いかけて追いかけて……雪国

窓に落ちる風と雪は 女ひとりの部屋には悲しすぎるわあなた

酔いたくて泣きたくてふるえるくちびる

そばにいて少しでもわがまま聞いて

追いかけて追いかけて追いかけて……雪国

好きな人はいるのあなた バカねバカな女ね意地をはってた私

逢いたくて夜汽車乗るデッキの窓に

とめどなく頬つたふ涙のあとを

追いかけて追いかけて追いかけて……雪国

(*印くりかえし)

「雪化粧」 1974(昭和 49)年 山上 路夫 詞 猪俣 公章 曲 テレサ・テン 歌

窓をあけたら 外は粉雪 音もなくつもるわ 街の屋根に

好きなあの人が 去ったこの街 冷たく長い 冬が来た

私はひとり 何を頼って 暮らせばいいの さびしい街で

愛の手紙を 燃やす暖炉の 炎が涙に ゆれているわ

コートはおって 外に出るのよ あなたの愛が のこる街

私は何を さがしにゆくの 足あと雪に のこしてひとり

遠い家並み 街の通りも きれいに白い雪化粧

私に春は 来るのでしょうか 愛した人が 見えない街で

「津軽恋女」1987(昭和 62)年

永井 俊一 原案 久仁 京介 詞 大倉 百人 曲 新沼 謙治 歌

津軽の海よ 竜飛岬は吹雪に凍えるよ
日毎夜毎 海鳴りばかり 愚図る女の泣く声か
津軽の女よ 別れうたひとつ くちずさむ
にがり酒に 想い出浮かべ かじかむころの 空を見る
※降り積もる雪 雪 雪 また雪よ
津軽には七つの雪が降るとか
こな雪 つぶ雪 かた雪 ざらめ雪 みず雪 かた雪 春待つ氷雪

津軽の女よ 枕乱して 引き込む恋女
愛に生きて 夢に生きて 白いかげろう 空に舞う
津軽の女よ ねぶた祭りのゆきずりたわむれか
過ぎた夜の 匂いを抱いて 帰れと叫ぶ岩木川
(※印くりかえし)

津軽の海よ 三味がゆさぶる じょんから聞こえるよ
嘆き唄か 人恋う唄か 胸のすきまに しみてくる
(※印くりかえし)
(※印くりかえし)

3. 雪の種類

ぼたん雪 {牡丹雪、綿雪、ぼたゆき、モチユキ} 牡丹の花びらのように大きな雪片ならびに降ってくる様子の呼称である。雪の結晶は上空では、一個一個の単独で、地表に向かって落ちてくる。結晶は落下途中で互いに触れ合い時には付着し合って地表へ達する。このとき気温が0℃に近いところでは数十ないし数千の結晶が、一つの塊、すなわち雪片になってしまう。その大きさは数cm、時には10cmにも及ぶことがある。比較的温暖な地方や、冬の初めや終わりの、気温があまり低くないときに降ることが多く、湿り気がある。

「空の名前」高橋 健司著、写真には粉雪、綿雪、牡丹雪、根雪、新雪、べた雪、どか雪、細雪……など雪の字の出てくる項目(写真と解説コメント)が実に三十余を数える。朝日新聞の天声人語子は「雪の名が多彩なのは、状況をこまかく認識し分けた先人の感受性、観察力のすばらしさを語る財産である。」と評している。

日本雪氷学会「雪氷辞典」では、

新雪、しんせつ、あらゆき {new snow、newly fallen snow} 積もって間もない雪でまだ降雪の結晶形が残っているもの。降雪の結晶形や雲粒付き、あられ混じり等の現を用いて新雪を細区分することがある。新雪結晶ではとがった部分が蒸発し次第に丸みをおび、他の雪質に変化するが、温度が低いほど、折衝が大きいくほど変化は遅い。

風がなく低温で大きな結晶が静かに積もるときの新雪密度は小さい。

こな雪、粉雪 {powder snow} 降り積もったばかりの乾いた雪の呼称。一般にはアスピリンスノーとも呼ばれる。

つぶ雪 {grain snow} 道路雪氷では、粒子間にほとんど結合がない。

ざらめ雪 {granular snow, coarse-grained old snow} 雪粒が 0°C 以上の気温や日射をうけると表面が融け水の膜でおおわれ、時間がたつと小さな雪粒同士が合体して大きな雪粒となる。これがざらめ雪で、融解と凍結を繰り返すと、急速にざらめ雪が発達する。

水べた雪 {slush} 融解が進み、含水率が非常に高い雪のこと。粒子間の結合は弱い。俗にシャーベット (状の雪) ともいう。

圧雪 (あっせつ) {compacted snow} 機械的におしつめられた雪。路面に積もった雪が、車の走行によって繰り返し圧密されたもので、雪粒子が高密度に充填され、かつ雪粒子が相互に網目上に結合した構造を持つ。

氷板 {ice layer} 積雪内に形成される板状の氷の層。厚さ 1 センチ前後になることもある。止水面の上に停滞した融雪水や雨水が水化したものである。氷化の原因は必ずしも寒気や夜間の放射冷却とは限らない。北陸地方ではとくに融雪期の 0°C のざらめ雪層の中で発達する。

太宰 治の小説「津軽」には表題の裏のページに津軽の雪として次の七種が出ている。しかし、小説本編にはこれといった記述はない。

こな雪 つぶ雪 わた雪 みず雪 かた雪 ざらめ雪 こほり雪

(東奥年鑑より) {ちくま文庫 太宰 治全集 7 から}

4. 結語

本研究ノートは、筆者が長年ラジオ・テレビ等気象解説の仕事上で調べた、暦と季節のかかわりを縦系に日本の民謡や唱歌、歌謡曲、文学作品などを横系にして織り込んだ内容となっている。日本の季節は、春夏秋冬の四季で代表されるが、それぞれの季節にふさわしい言葉、表現、それを身近な唱歌や日本民謡、歌謡曲、日本文学などでわかりやすく解説しようとしたものである。日々の暮らしの中で感じる季節感、季節の変化を歌や文学作品とともに紹介した。

引用文献

- ① 国立天文台 HP、気象庁 HP、「日本民謡集」岩波文庫、「四季のことば辞典」嶋岡晨 大和出版、
- ② 「徒然草」吉田兼好 岩波文庫、
- ③ 「武蔵野」国木田独歩 新文学書房、「広辞苑」岩波書店、
- ④ 「衛星で見る日本の気象」岩波書店、「日本の風」田口龍雄 気象協会、カラー「気象歳時記」山と

- 溪谷社、
- ⑤ 「あの歌この歌」 91 版 CBS ソニー出版、
 - ⑥ 「昭和流行歌詞」 毎日新聞社、雑誌「太陽」N0245 演歌・艶唄・怨歌、「日本民謡集岩波文庫、「広辞苑」
岩波書店、
 - ⑦ 「千曲川のスケッチ」 島崎藤村 岩波文庫、
 - ⑧ 「小春」 国木田独歩 新文学書房、
 - ⑨ 「雪国」 川端康成 新潮文庫、
 - ⑩ 「雪氷辞典」 日本雪氷学会、「太宰 治全集 7」 ちくま文庫、
 - ⑪ 「空の名前」 高橋健司 写真・文 光琳社出版、
 - ⑫ 「四季の教科書」 高橋健司 写真・文 教育出版

Season to Japan of season Classification (popular song,songs,folk songs
And literature works) to express

Certificated weather forecaster
TOMIZAWA Masaru

Season to Japan of season classification (popular song, songs, folk songs and literature works) to express in this paper,we have studied the relationship between calendars and seasonsas the warps of japanese folk songs and songs,etc.

japan's seasons are represented by spring,summer,autumn and and winter,
And four seasons,but the words,expressions,and so on appropriate for each season were tried to be explained in an easyj-to-understavid manner using chanting songs,Japanese folk songs,and songs.

In Japan,many wards that are appropriate for each season have been expressed in Wark and Haiku, literary warks,and folk songs, songs and songs (popular songs).There are countless seasonal words and songs,literature,waka and haiku, and it is not a very good introduction.We will be limited to a few introductions,but I would like to talk about it this time.

2018年度 出品作品 五十音順

絵画「襖絵」 伊藤眞理

写真「祭り」 戌丸ぜの

帯地「萩・りんどう」 北畠雪子

壁掛「陽光」 小島貞二

墨描画「あこがれ—longing—(camellia)」 小島香

玩具「ポニーテール (カオス・オートマタ)」 渋谷寿

韓国伝統「組紐」 杉本富喜子

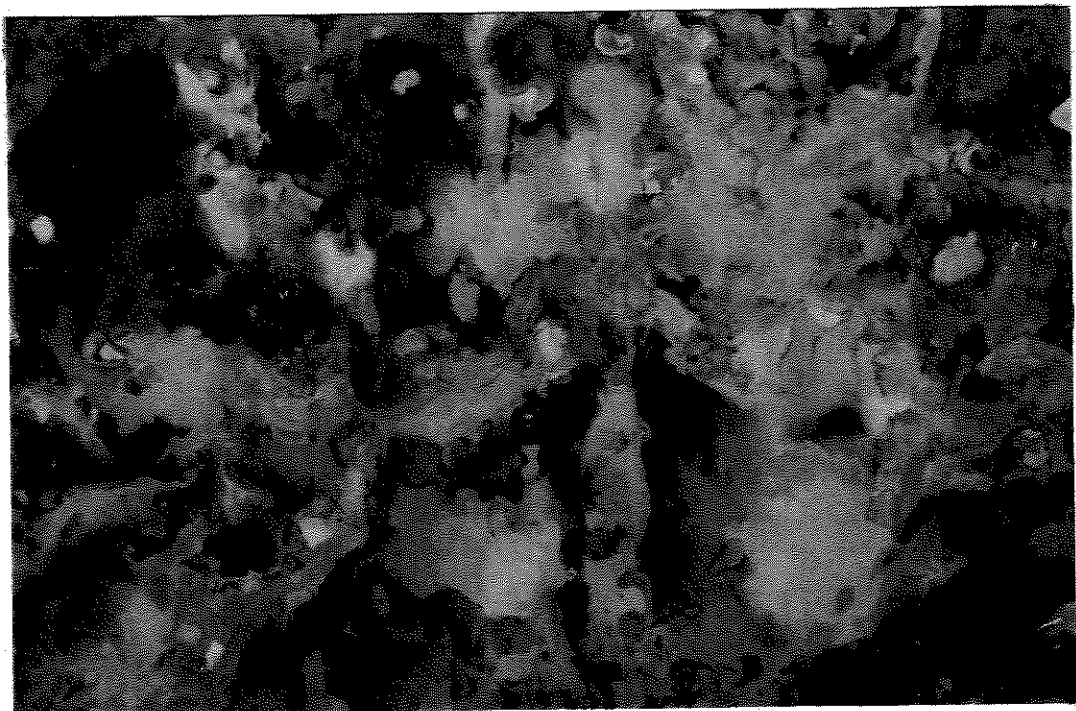
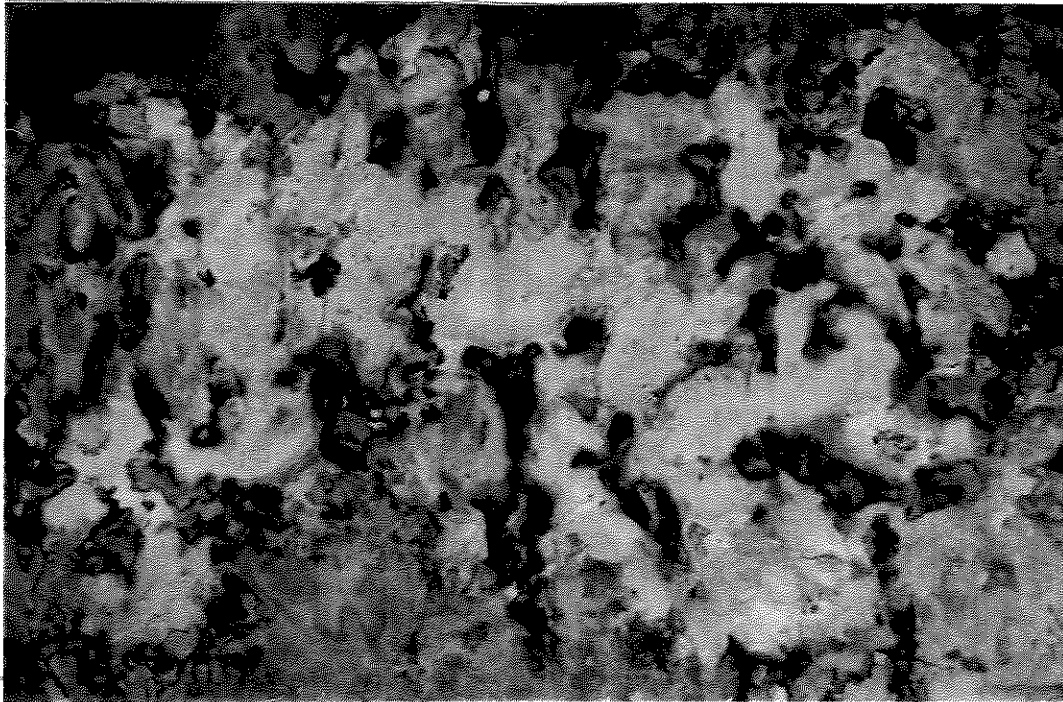
墨彩「安曇野」 中村石浄

手織り布「森へ行こう」 山本和子

磁器「白磁鉢」 兪期天

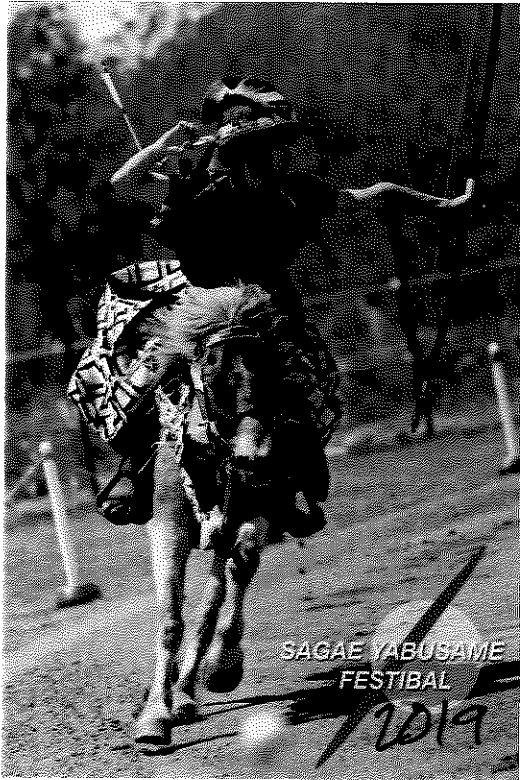
絵画「襖絵」

伊藤 眞理



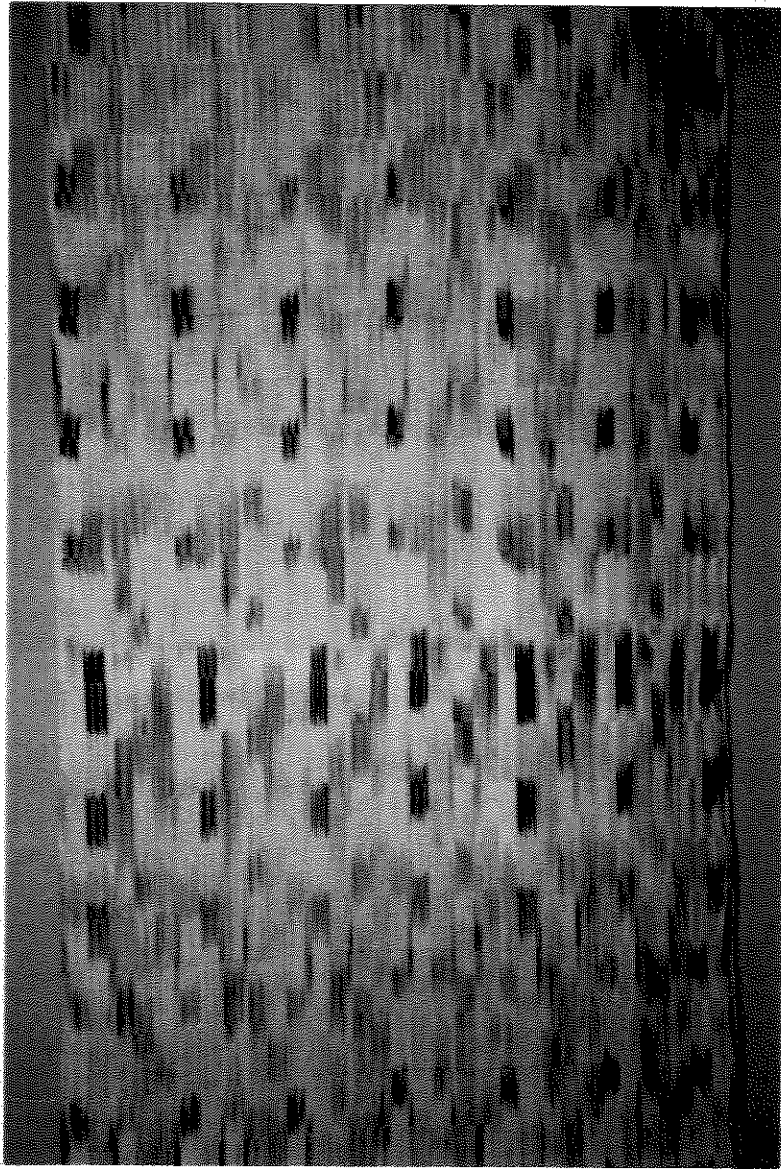
写真「祭り」

戌丸 ぜ の



帯地「萩・りんどう」

北 畠 雪 子



りんどうの花が植木鉢に植えてあるのを買って見ていました。
青いつぼみが並んで美しかったので、緋に織りました。
同じ頃、近所で萩を見て紫がかった茶も、ここに染めてみました。

壁掛「陽光」

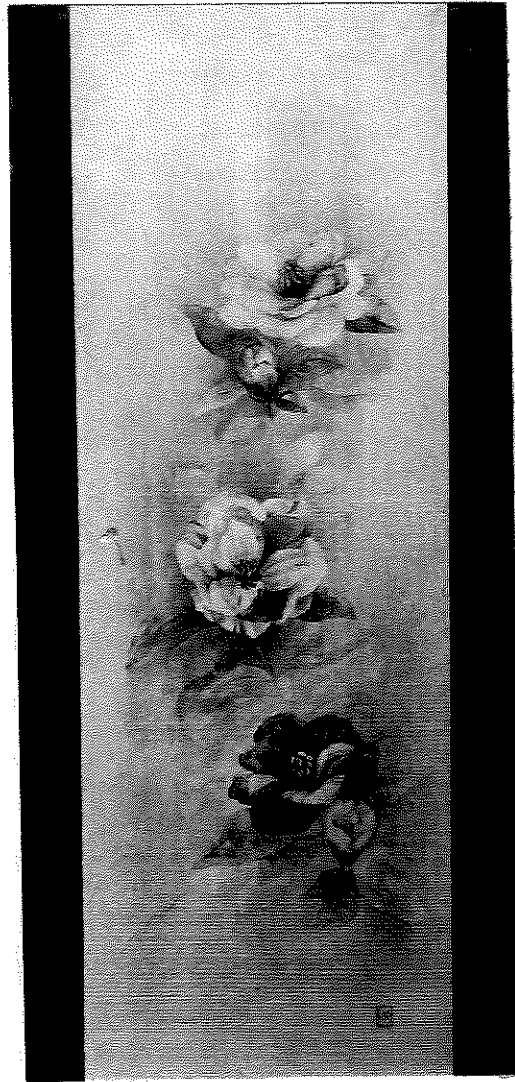
小島貞二



麻生地に染料で描いたのち、市松の型染でさらに色分けして顔料で描いていきます。

黒描画「あこがれ—longing—(camellia)」

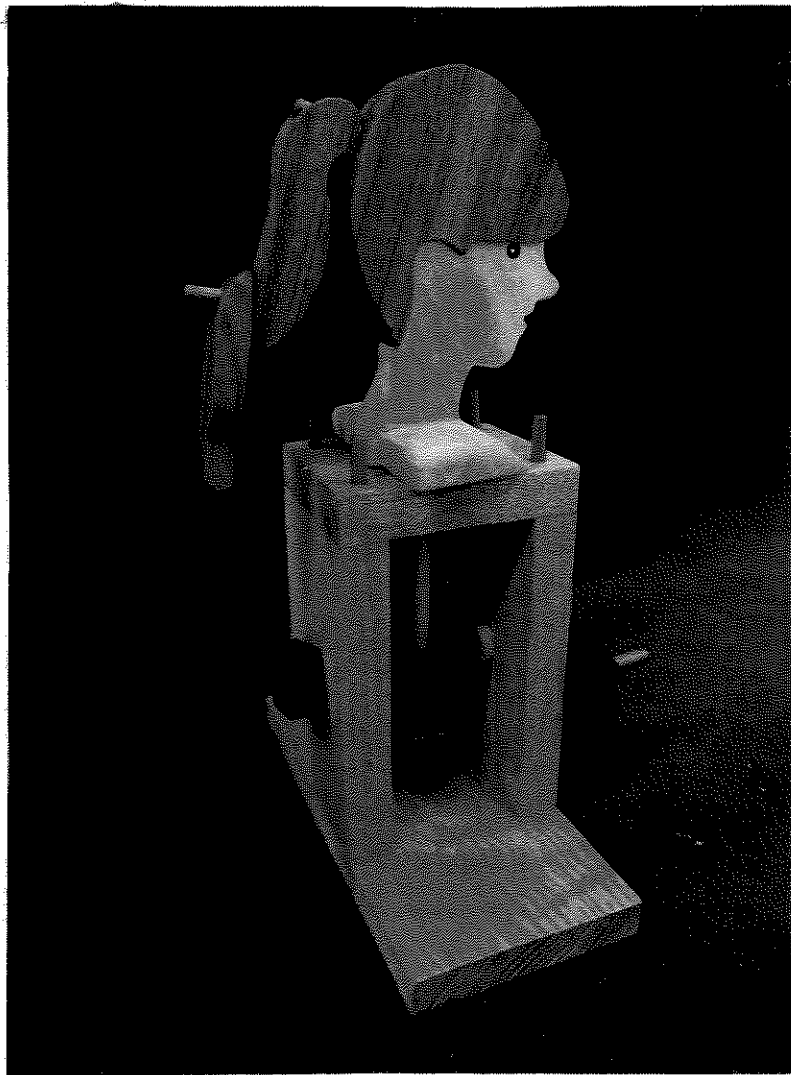
小 島 香



和紙に下地を施したのち、墨で描いています

ポニーテール (カオス・オートマタ)

渋谷 寿



韓国伝統「組 紐」

その1

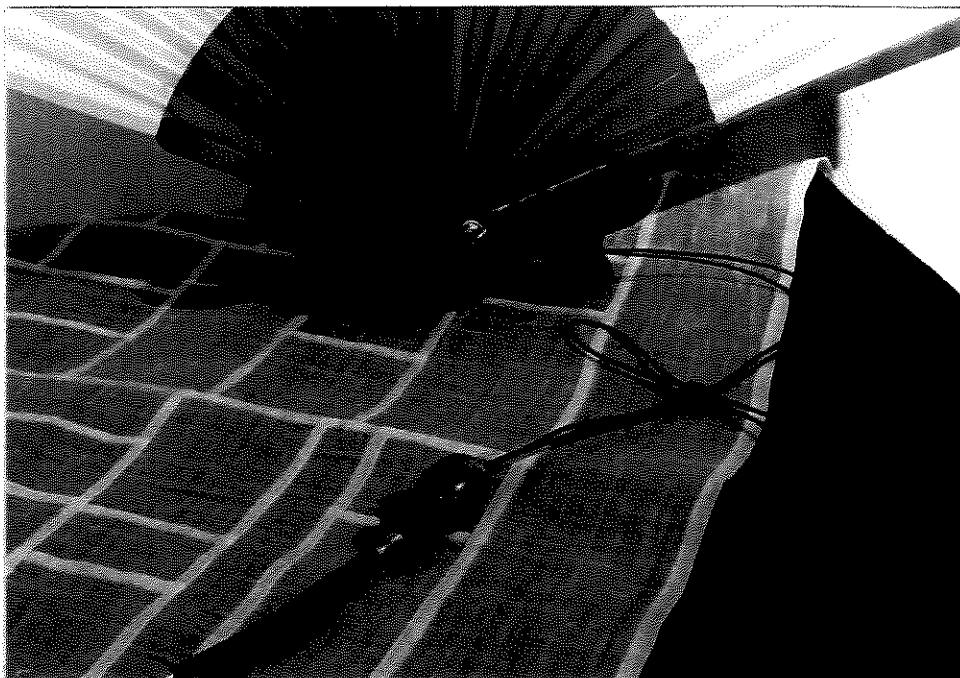
杉 本 富 喜 子



韓国伝統の組紐工芸 メドゥプ(毎緯、maedeup)技法でソンジユ(扇鍾)を製作。
円多絵(丸紐)と広多紐(平紐)の2種のクンモック(組紐)を紐み、トンシムギョルや
ヨンボンメドゥプと言われる結びによる作品

韓国伝統「組紐」 その2

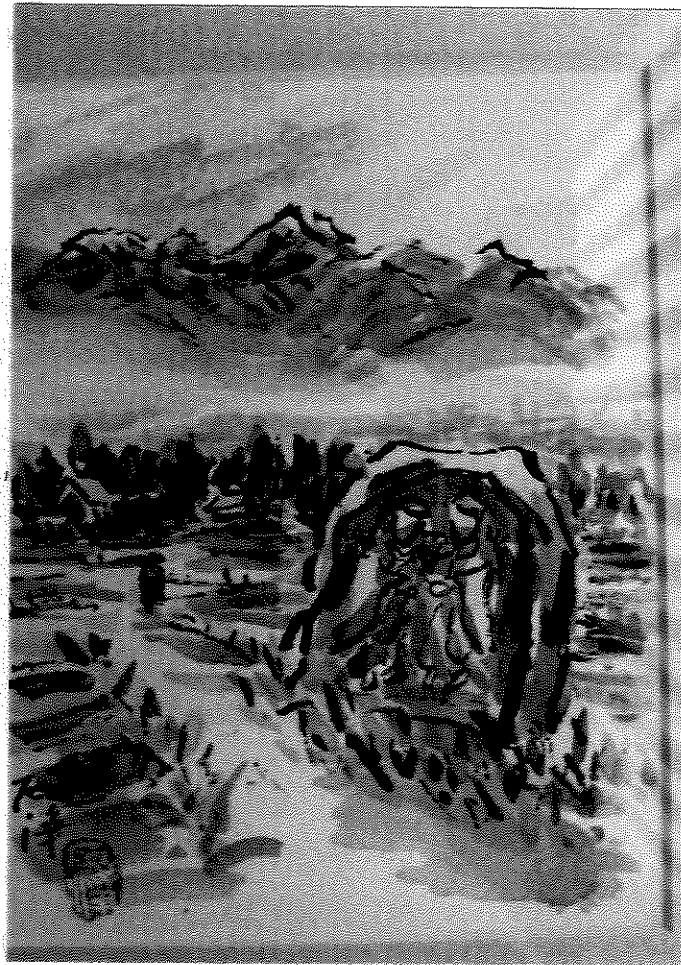
杉本富喜子



韓国伝統の組紐工芸 メドゥプ(每緯、maedeup)技法でソンジュ(扇鍾)を製作。
円多絵(丸紐)と広多紐(平紐)の2種のクンモック(組紐)を紐み、トンシムギョルや
ヨンボンメドゥプと言われる結びによる作品

墨彩「安曇野」 その1

中 村 石 浄



松本市芸術文化功労賞受賞 松本美術館友の会会長
上野の森美術館写実画会員

墨彩 「上高地の秋」
その2

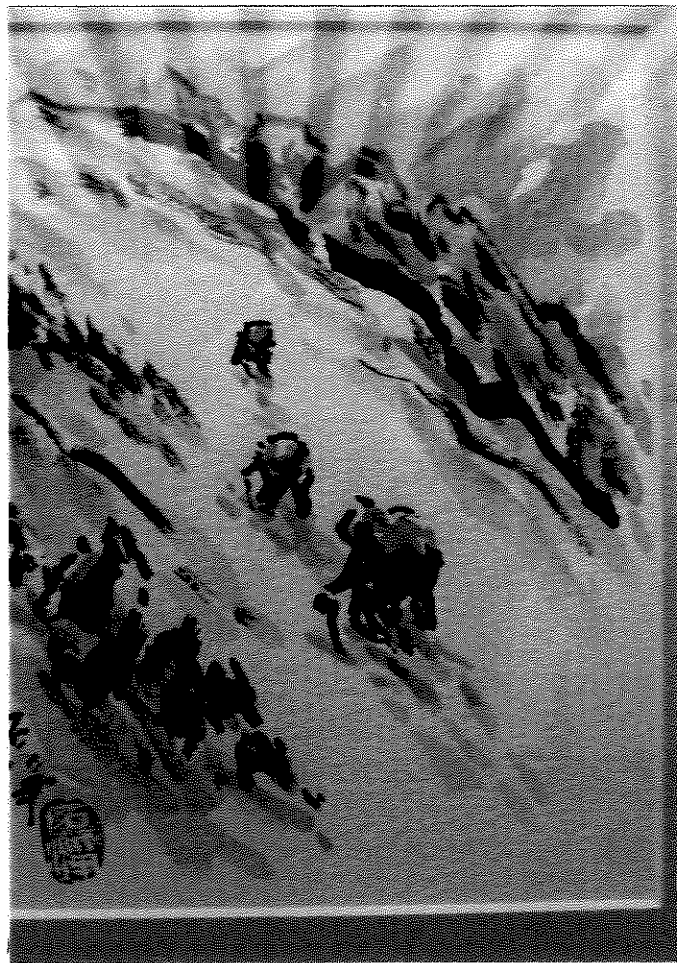
中 村 石 浄



松本市芸術文化功労賞受賞 松本美術館友の会会長
上野の森美術館写実画会員

墨彩「雪山を行く」 その3

中 村 石 浄



松本市芸術文化功労賞受賞 松本美術館友の会会長
上野の森美術館写実画会員

墨彩「信州小谷村雪景」 その4

中 村 石 浄

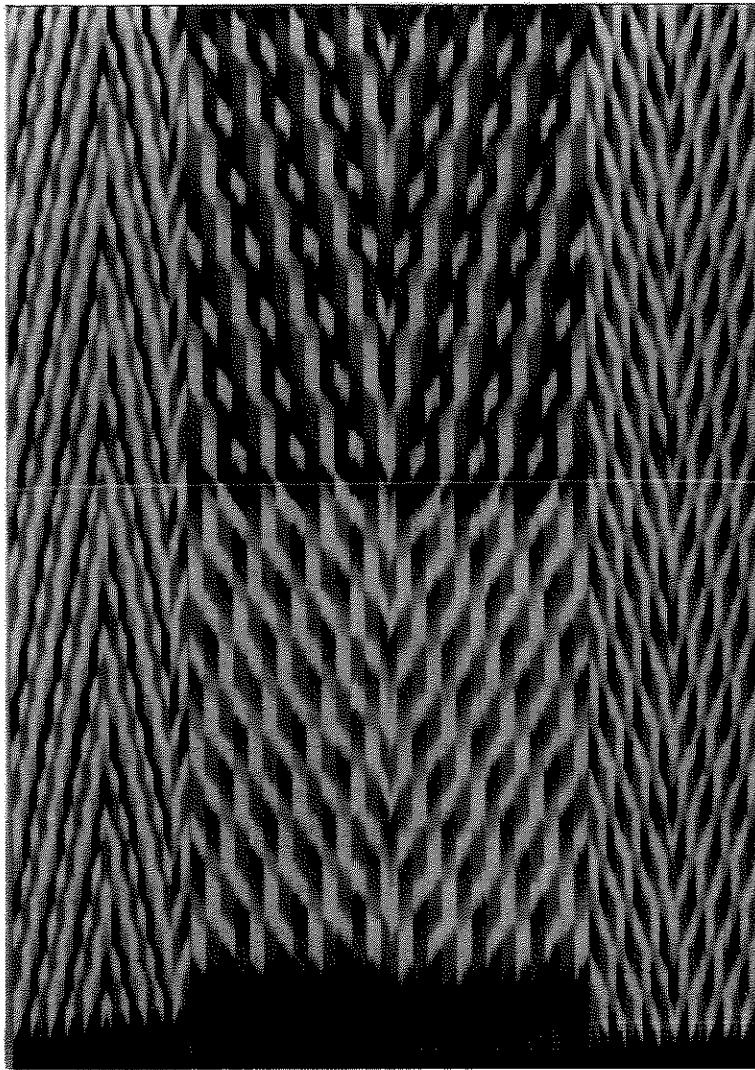


松本市芸術文化功労賞受賞 松本美術館友の会会長
上野の森美術館写真画会員

手織り布「森へ行こう」

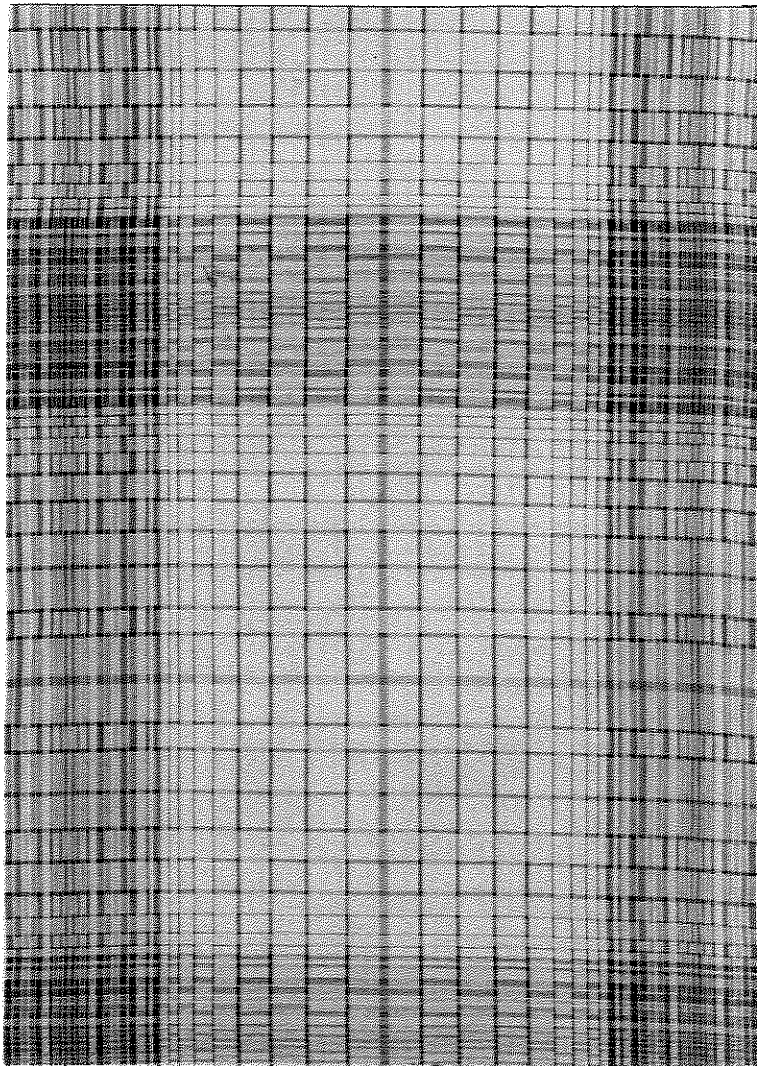
その1

山 本 和 子



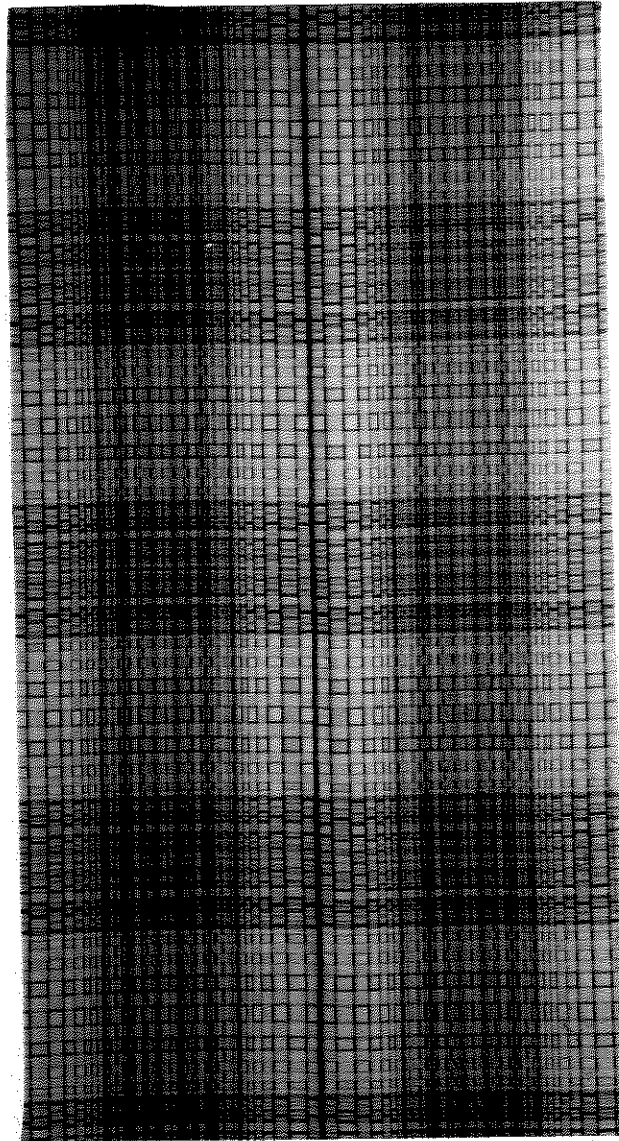
手織り布「森へ行こう」 その2

山 本 和 子



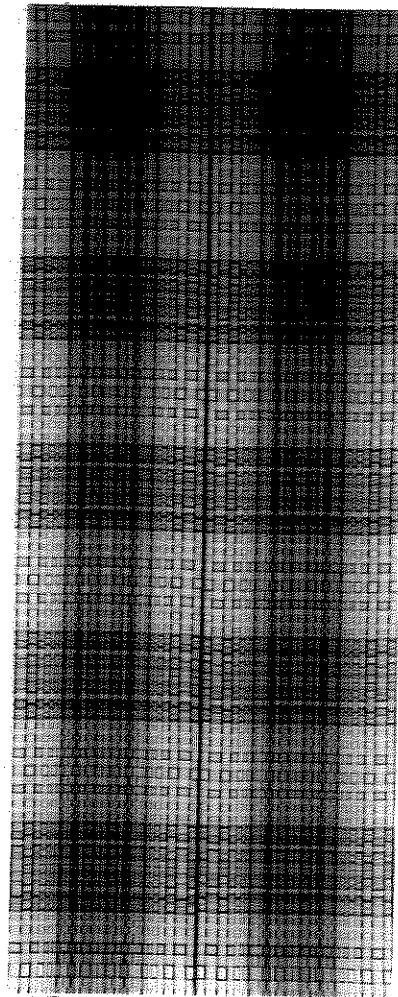
手織り布「森へ行こう」
その3

山 本 和 子



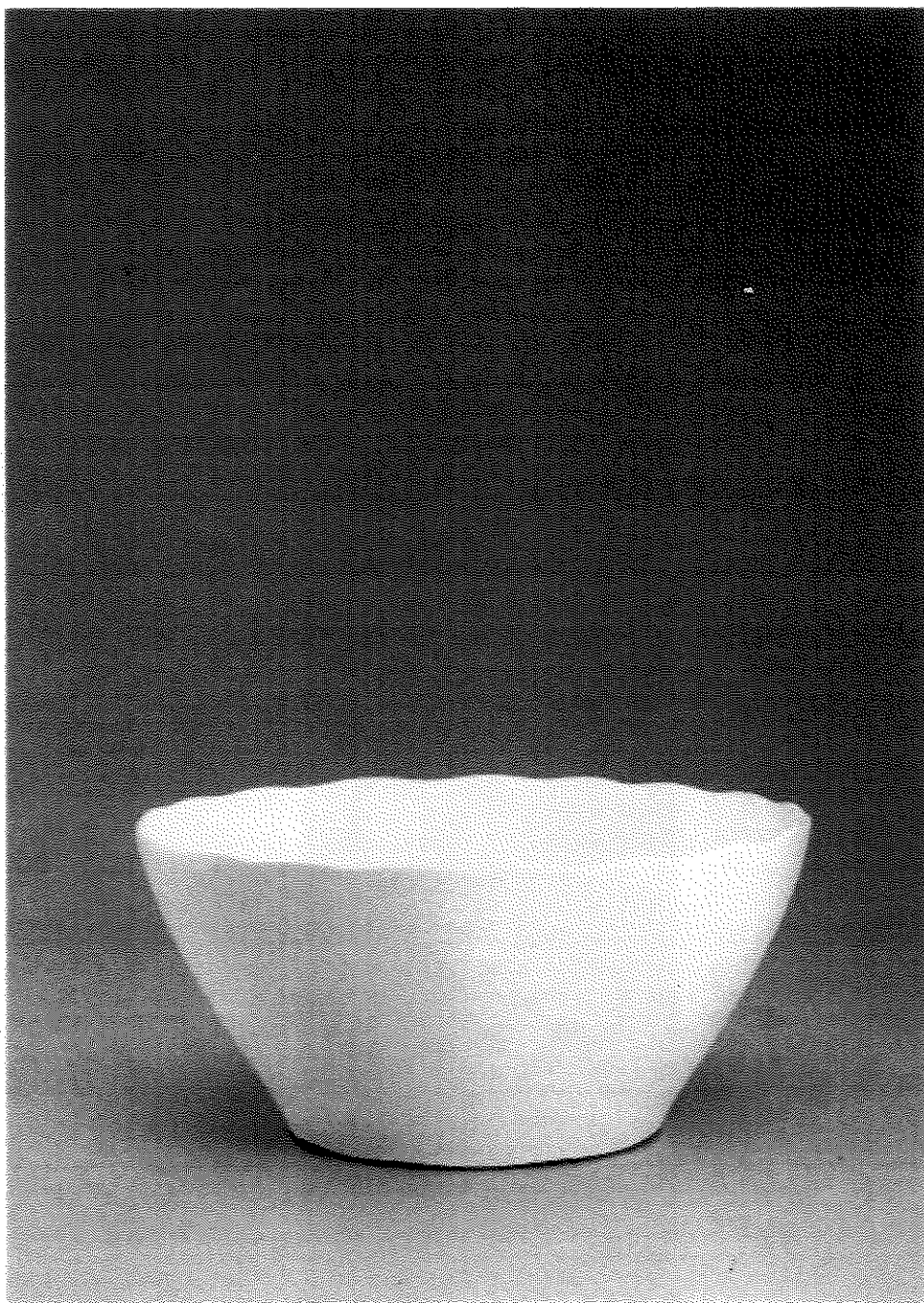
手織り布「森へ行こう」 その4

山 本 和 子



磁器「白磁鉢」

愈 期 天



白磁鉢

これまで私は染付と釉裏紅で蓮をモチーフに絵付を施した作品を継続的に制作してきました。この作品では絵付けではなく、器形に蓮を表現しようと取り組みました。鉢の形態は蓮の花が膨らむイメージで丸みを帯びた形を意図し、蓮の葉が豊かに揺らめく様子をヒントに、口形と高台部分が波打つような形になるように変化を与えました。

高台は二重にすることで外側では繊細な形を表現し、内側では鉢の大きさと重さをしっかり支える役割をしています。釉薬は、ややマット質なものを使用し、吹付けの方法で施釉しています。

そのことにより細かな表情をつけ、独特の質感を得ることができました。あえて絵付けを施さず、器形の細部を強調するために白磁で仕上げました。



Journal of The Society of
Asian Culture and Forms
No.17

Society of Asian Culture and Forms
2019